

東海の中世煮炊具

三重大学大学院
人文社会科学研究科地域文化論専攻
117M206 花木ゆき乃

目 次

はじめに	1
第 1 章 先行研究と課題	2
第 2 章 土師質煮炊具	5
第 1 節 器種構成	5
第 2 節 土器組成	12
第 3 節 遺物の口径	17
第 3 章 鉄製煮炊具	20
第 1 節 鉄製煮炊具の概要	20
第 2 節 鉄製煮炊具出土事例	23
第 3 節 鉄製煮炊具と土師質煮炊具	27
第 4 章 煮炊具の流通	30
おわりに	33
表	35
参考文献	38
図表出典	46

図表目次

図 1	器種分類	6
図 2	遠江型鍋	7
図 3	煮炊具の地域別変遷	8
図 4	器種別比率(東海)	10
図 5	器種別比率(三重県)	10
図 6	器種別比率(三重県中北勢)	10
図 7	器種別比率(三重県南勢)	10
図 8	器種別比率(愛知県)	11
図 9	器種別比率(尾張)	11
図 10	器種別比率(三河)	11
図 11	器種別比率(岐阜県)	12
図 12	安濃津遺跡群の土器組成	13
図 13	伊坂城跡の土器組成と土師器の器種構成	14
図 14	清洲城下町遺跡(93D 区)産地・材質別組成	15
図 15	土器組成	15
図 16	内耳鍋の口径(清洲城下町遺跡)	18
図 17	内耳鍋の口径(名古屋城三の丸遺跡)	18
図 18	内耳鍋の口径(麻生田大橋遺跡)	19
図 19	伊勢型鍋の口径	19
図 20	鍋・釜の口径	19
図 21	釜の口径	19
図 22	鉄製煮炊具の分類	20
図 23	一乗谷朝倉氏遺跡の鉄鍋と五徳	22
図 24	一乗谷朝倉氏遺跡の鉄鍋②	22
図 25	東海の鉄製品①	26
図 26	東海の鉄製品②	26
図 27	穀見塚前遺跡の釜	26
図 28	陶器の流通圏	32
図 29	煮炊具の地域圏	32
表 1	主な煮炊具出土遺跡	35

はじめに

中世の煮炊具には鉄製と土製がある。中世の鉄製煮炊具は、鍛造ではなく鑄造によって作られたもので、祭祀用や副葬品とされた青銅鑄物と比べると装飾性は少ない。土製煮炊具は大きく分けて土師質のものと瓦質のもの 2 種類がある。一部では陶器の煮炊具も存在するが、ほとんどが土師質と瓦質であり、考察地域に定めた東海地方では土師質が主体となっている。

土師器の器形には、貯蔵用の壺や煮炊き用の鍋・甕・甑と供膳用の皿・坏、調理用の鉢などがあつた。須恵器の出現後は、貯蔵用には須恵器、煮炊き用には土師器、供膳用には須恵器と土師器の両方という具合に使い分けられるようになる。

中世になると、古代では威信財として支配者層に独占された漆器が、律令国家の崩壊とともに新たな生産を開始した。11 世紀には安価な製品が出現し、陶磁器や瓦器椀などとの相互補完による新しい食膳形式が生まれた(四柳 2003)のである。土師器の供膳具は「かわらけ」とも呼ばれ、一度限りで廃棄される儀礼用の器として使用された例や灯明皿として使われた例が多数みられる。木製品は曲げ物や釜の蓋としても使われていた。煮炊具では土製や鉄製の鍋・釜が使われ、貯蔵具では陶器製の甕や壺、調理具では陶器製の播鉢が用いられた。近世になると、陶磁器の普及によって供膳具としての土師器は駆逐されていった。

東海地方は瀬戸美濃・常滑に代表される全国屈指の窯業地を抱えている影響か、陶器の研究の蓄積が厚い。そして、陶器の編年を利用して土器の編年や生産について盛んに論じられてきた。中世後期には、伊勢や尾張で在地産土器の型式や分布に変化が生じたことが明らかにされている。だが、なぜ中世後期にこの地域の土器が独自の発展を遂げたのかについてはあまり触れられてこなかった。煮炊具は、既に鉄製のものが存在していたはずで、耐久性が劣ると思われる土師質煮炊具が中世後期になっても発展したのはどうしてなのだろうか。

このような疑問点に対して、先学の研究成果の裏付けを行うとともに、鉄製煮炊具との比較によって東海地方における煮炊具の消費と流通を明らかにする。

第 1 章では先行研究の課題と本研究の研究目的を示した。第 2 章では各地域の煮炊具の様相や組成にどのような相違点があるのか明らかにし、先学の研究の裏付けを行った。また、個々の遺跡から出土した遺物について器種構成や口径に関する分析を行い、遺跡単位での特徴や傾向を把握した。第 3 章では鉄製煮炊具に焦点を当てて土師質煮炊具との比較を行い、煮炊具の消費と普及について論じた。第 4 章では広域流通品である陶磁器の流通構造との相違点を考え、文献史学の研究成果も参考にしながら煮炊具の流通構造について考察した。

第1章 先行研究と課題

中世の遺物に関する研究は、大きく二つに分かれる。中世陶磁器についての研究と土師器など在地の土器についての研究である。長らく美術の領域とされた中世陶磁器の研究は、伝世品に基づく様式的研究が中心であったが、その後、出土資料を活用した研究が行われるようになった。また、陶磁器の編年や製作技法などを中心とした研究が進み、国産陶器や輸入陶磁器との共伴から在地の土器の編年が試みられるようになった。

瀬戸美濃焼や常滑焼の窯業地がある東海地方では、陶器に関する研究が盛んだったが、新田洋が在地の土師質煮炊具に関する研究を発表したことで、土器に関する研究も行われるようになった。新田は、三重県内の中世遺跡、特に集落遺跡から出土する土器について、三重県独自の形態がみられると指摘した(新田 1985)。平安時代から戦国時代にかけて伊勢地方に分布する鍋形態の土器を「伊勢型鍋」と名付け、古代の甕からの型式変遷と編年、分布について示した。そして、10世紀後半くらいに長胴甕が消失し、甕形態が画一化して鍋形態になっていくと指摘する。伊勢型鍋は扁平球状で、口頸部から口縁端部が内側に折り返されて肥厚または面を作るのが特徴で、伊賀以外の三重県内に出土が多いという。

新田の研究を受けて伊藤裕偉は、土器が南勢地域に集中的に分布することや、鍋形態以外の土器、例えば小皿や羽釜、甕などにも南勢独自の形態があることを主張し、「南伊勢系土師器」という包括的な概念を提唱した(伊藤 1990)。器壁が薄いことや、口径 35 cm 以上のものはなく、30 cm 以上のものは稀であることが特徴だという。胎土の共通性や細部形状の類似性、土器の調整手法の類似性から一定の製作者あるいは製作者集団の存在が指摘でき、南勢地域で作られた可能性が高いと指摘している。また、南伊勢系土師器の代表的な器種を鍋とし、金属製煮炊具の流入はあったものの、その直接的な影響は受けずに製作された土器であるとする。

この鍋は、12世紀中頃から14世紀前半の中世前期には、三重県南部の南勢地域を中心として、中北部の中北勢地域や尾張、三河、美濃、遠江の東海地方に分布し、さらに相模(鎌倉)や信濃、上総、下総にまで広く分布していた。14世紀中頃から16世紀後半の中世後期になると、中北勢や鎌倉で減少する代わりに、新たに大和の宇陀や紀伊東部に分布するようになる。伊藤は、こうした分布状況から、領主権力と土器工人との関係を想定している。すなわち、中世前期は伊勢神宮の神領拡大と神宮信仰の普及が関連し、後期は北畠氏の影響もしくは生産側の工人が独自性を持つようになったのではないかと指摘する(伊藤 1992)。

新田と伊藤の論が発表された後、伊勢をはじめとして尾張や三河、美濃で出土

する在産鍋が伊勢型鍋や南伊勢系鍋と呼ばれて注目されるようになった。両者の研究は東海地方の在産土器研究における方向性を提示した点で重要だと言える。なお、本研究では新田が提唱した伊勢型鍋の名称で呼ぶことにしたい。

尾張の伊勢型鍋を分類し、山茶碗等との共存関係をもとに編年を行ったのが北村和宏である(北村 1996)。尾張では 13 世紀後半に鏝が体部の最大径より高い位置につく羽釜(北村分類の羽釜 A)が出現し、伊勢型鍋と共に煮炊具の中心となった。しかし、15 世紀後半になると伊勢型鍋と羽釜 A が消滅し、茶釜形羽釜(同茶釜 A)と内耳鍋(同内耳鍋 A)、そして鏝の部分が土器の最大径となる羽釜(同羽釜 B)に変わるといふ。

鈴木正貴は、東海地方(尾張、西三河、東三河、遠江)の内耳鍋、羽付鍋、羽付釜についてそれぞれ器種分類と編年を行った(鈴木 1996b)。東海地方の鎌倉時代以降の煮炊具は、旧国(または郡)単位程度で様相が異なると指摘する。

伊勢型鍋や羽釜・内耳鍋・炮烙などの薄手・軽量の土師質煮炊具が、鉄製品と共存しつつ、時代と地域性を反映して展開したと指摘したのが金子健一である(金子 2000)。中世後半の東海と東国、特に伊勢から房総に至る太平洋湾岸部が示す地域相について、次のように述べている。

東海地方では伊勢型鍋が中心で、鎌倉や武蔵といった搬出先でも同じ状況である時期から伊勢型鍋が分布範囲を狭め、南勢・志摩・伊賀の狭域流通圏を形成する時期へと変わる。伊勢型鍋が分布範囲を狭める時期には、尾張・三河・遠江では土師質煮炊具の主流が伊勢型鍋から羽釜形煮炊具に転換し、南関東全ての地域で羽釜形煮炊具が確認されるようになるという。その後さらに、南勢以外の地域で羽釜形煮炊具が主流となり、三河・遠江で内耳鍋の生産が始まるようになる。そして、羽釜形煮炊具が各地で激減し、尾張でも内耳鍋の生産が始まる時期へと移行する。

金子はこういった変化の要因として、主体性を持った工人集団や地域に密着した商人の存在を想定している。東国での需要については、鉄製煮炊具の補完品としてではなく、羽釜という形に独自の存在価値と用途を見出し、選択的に入手していたと考えざるを得ないという。また、羽釜形煮炊具の性格や用途については特定できないが、水を沸騰させるために使用された土器との推定がされており、搬出先でも同様だったのではないかと指摘する。

筆者も、土器生産の変化には工人集団や商人の変化が影響したと考えているが、工人や商人に変化が生じた要因までは言及されていなかったため、第 4 章で流通構造について詳述することにする。

以上が主な先行研究の成果であるが、これらの先行研究に対していくつかの課題が挙げられる。

陶器の研究が盛んだった東海地方では、伊勢型鍋の研究に代表されるように、陶器編年を参考に土師質煮炊具の編年や形態変化など、土器生産については盛んに論じられてきた。しかし、どのように使用されていたのか、どのように流通したのか、といった消費に関してはあまり触れられてこなかった。

また、日常の煮炊具として鉄製煮炊具が使われ出したと言われているにもかかわらず、資料の少なさから鉄製煮炊具についてはほとんど分析対象とされてこなかった。全国的にみた煮炊具地域圏は、琵琶湖と伊勢湾を境界にして東と西、そして日本海側という三つの地域に分けられる(小野 1991)というが、土師質煮炊具と鉄製煮炊具が併存して利用されていたと考えられる地域と、鉄製煮炊具のみを使用していたと思われる地域の違いについて、具体的な理由があまり検討されてこなかった。この問題は、鉄製煮炊具と比べて耐久性が低いと考えられる土師質煮炊具が、なぜ独自の発展を遂げたのか、ということとも関係しているのではないだろうか。より小さい地域圏で見た場合、東海地方では愛知県と三重県の間境界があることになるが、愛知県と岐阜県が東側の地域圏に含まれ、三重県は西側の地域圏に含まれるということになる。琵琶湖から伊勢湾の境目には遺物にどのような差異がみられるのだろうか。

本研究では、上記の課題に対して考察を行う。東海地方における土師質煮炊具の消費と流通について明らかにするために、先学の研究成果の裏付けを行うとともに、鉄製煮炊具との比較によって東海地方における煮炊具の消費と東西日本の境目における地域性を示すことを目的とする。

分析対象範囲は愛知県・岐阜県・三重県の東海三県とする。なお、三重県は伊勢地域のみを分析対象範囲とし、現津市以北を中北勢、津市より南を南勢とした。ただし、現津市で旧美杉村に所在する北畠氏館跡(多気北畠氏遺跡)は、南勢支配を行った北畠氏の本拠地のため、南勢に含めた。

とはいえ、中世全期に渡って考察を行うことは私の力では及ばないため、主に13世紀～16世紀(室町時代～安土桃山時代)の遺跡から出土した遺物を中心に考察を行うこととする。この時期の遺物を考察対象としたのは、この地域の土器が独自の発展をし、器種構成や形態に変化が起こった時期とされていることから、この時期の政治的もしくは経済的な何らかの変化が土器づくりにも影響したのではないかと考えたためである。また、集落遺跡や寺院、城館遺跡といった遺跡の性格の違いによって煮炊具の組成に違いがあるのかについても明らかにしていきたい。

本研究では、土師質で煮炊き用の鍋や釜、炮烙の総称として「土師質煮炊具」を用い、単に鍋・釜・炮烙と言った場合、特に断らない限りは土師質のものを指している。

第 2 章 土師質煮炊具

第 1 節 器種構成

煮炊具は、そもそもの鍋や釜といった基本的な名称から、様々な器種の細かい名称まで論者によって色々な見解があり、煩雑になっている。

本研究では、形態の違いによって、鍋・釜・炮烙の三つに大別して考える。鏝がないものを鍋、鏝があるものを釜、鏝の有り無しにかかわらず、平たい形態のものを炮烙とした。さらに、鍋・釜・炮烙のそれぞれを細かい形態の違いから細分し、慣用的な表現で呼ぶことにした(図 1)。

鍋は、伊勢型鍋・内耳鍋・茶釜形鍋に大別した。伊勢型鍋は先行研究で提示されたように、扁平球状で伊勢地域の特に南勢で多量に出土する鍋である。内耳鍋は内耳が付く鍋であり、半球形のものと同様に口縁部が屈曲して外側に開いた「く」の字形の 2 種類がある。茶釜形鍋は鏝がない茶釜形の鍋である。茶釜と言うと、鉄製で茶道具として使われるものだが、これに類似する形態の土師質の茶釜も存在し、鏝の有無によって茶釜形鍋や茶釜形羽釜と呼ばれている。

釜は、羽釜・茶釜形羽釜に大別した。羽釜は形態からさらに二つに細分した。北村分類に従い、鏝より下の体部が最大径となるものを A 類、鏝の部分が最大径となるものを B 類と呼ぶ(北村 1996)。B 類は A 類より後に出現したという。北村はさらに詳細にそれぞれの羽釜を分類しているが、ここでは羽釜の最大径の位置のみに注目した。茶釜形羽釜は茶釜に鏝が付いているものである。その他の特殊な器種の器種名は報告書の表記に従った。

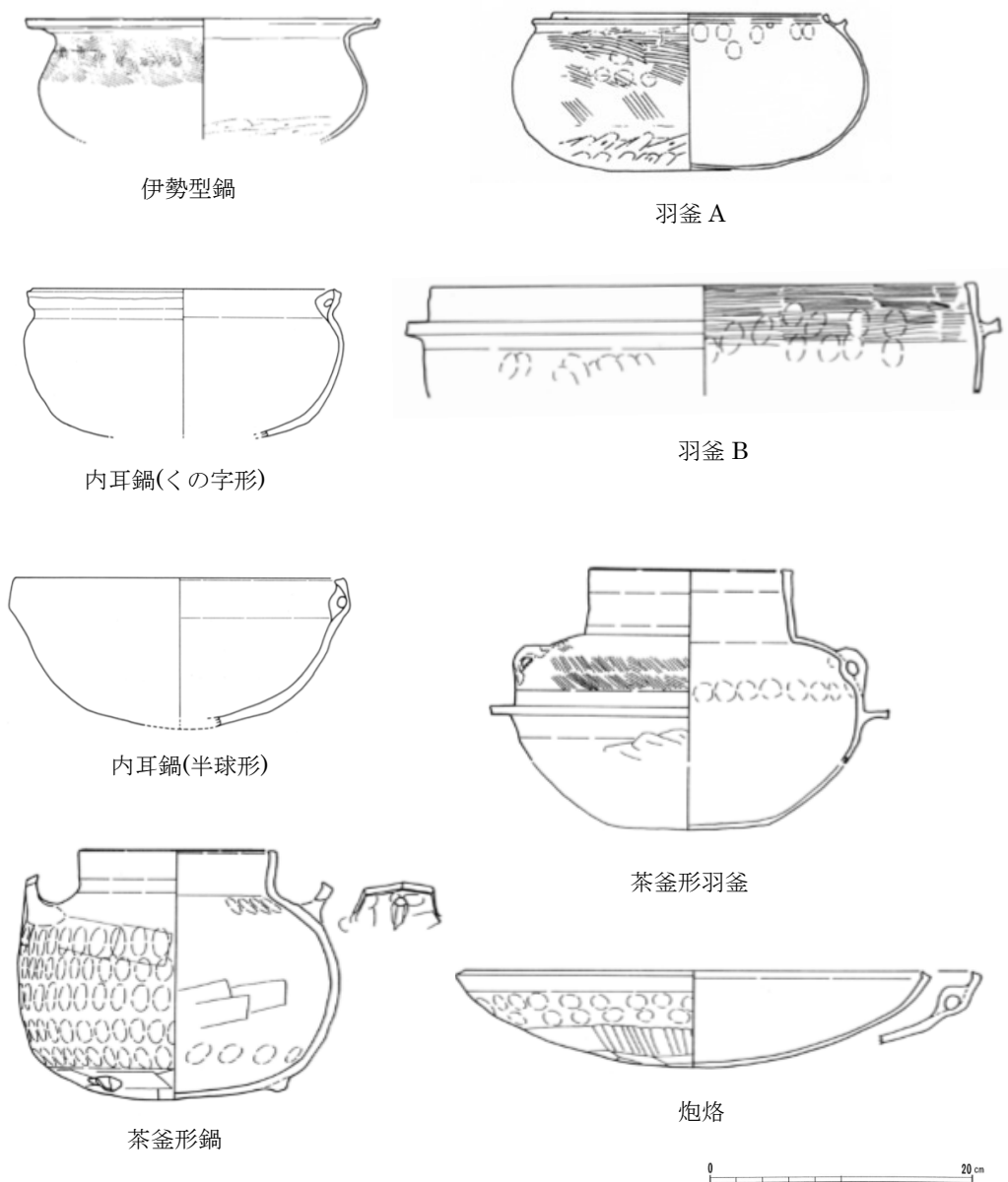


図1 器種分類

では、東海地方の煮炊具について地域ごとの相違点を検討する。土師質煮炊具の変遷を模式図として図3に示した。北勢(中勢も含む)・南勢・尾張・三河・美濃・遠江の各地で伊勢型鍋が中心となる時期から、伊勢型鍋が分布範囲を狭める時期へと移行する。それによって、尾張や三河・遠江では煮炊具の主流が伊勢型鍋から羽釜に転換する。その後さらに、南勢以外の地域で羽釜が主流となり、三河や遠江で内耳鍋の生産が始まるようになる。そして、尾張でも内耳鍋の生産が始まる(金子 2000)。

近世になると、土師質煮炊具は炮烙が主体となり、鍋や羽釜形態のものは次第

に減少していく。尾張で土師質の内耳鍋や釜が消滅するのは 19 世紀中頃で(鈴木 1996b)、この頃から鉄鍋や鉄釜が中世以上に普及したと言われている。

北勢の煮炊具は、古代末期から伊勢型鍋に連なる形状の甕が既にみられ、中世前期から煮炊具の中心的存在となっている。その後も伊勢型鍋は煮炊具の中心であるが、中世の中期後半になると減少し始め、代わって羽釜がよくみられるようになる。この時期の羽釜は、口縁部に焼成前穿孔がみられる。焼成前穿孔は同時期の南勢や尾張の羽釜にはみられないもので、北勢地域の特徴とされている。

南勢では、中世を通じて伊勢型鍋が煮炊具の中心を占め、それ以外の煮炊具はほとんど出土していない。しかし、中世の中期後半になると羽釜がみられるようになる。さらに、後期には炮烙なども出現し、器種構成が多様化する(尾野 1997)。

尾張の煮炊具は、土師器が主流である。古代末期には清郷型の鍋(あるいは甕)が目立つが、中世前期に消滅する。清郷型鍋は愛知県一宮市の清郷遺跡の資料を基準とする土器であり、10 世紀～12 世紀前半の土器と共伴する。全体の器形は羽釜状で口縁部は「L」字状もしくは「く」字状をしている。体部はほぼ球胴で底部は丸底である。愛知県を中心に三重県や静岡県、岐阜県に分布する。25 cm 前後の大型品、21 cm 前後の中型品、16 cm 前後の小型品の 3 種類があるが、中型が最も多くみられる(永井 1996)。中世前期から中期は伊勢型鍋の全盛期であり、その後は羽釜が主流となる。そして後期になると、内耳鍋や大型の羽釜が出現し、茶釜形羽釜や炮烙もみられるようになる。

三河では、中世前期に煮炊具の出土例が増え始める。ほとんどが伊勢型鍋であるが、後期には伊勢型鍋の他、遠江型鍋や尾張で一般的な、体部が最大径となる羽釜(A 類)がみられる。近世になると遠江型のものがみられなくなっていく(尾野 1997)。遠江型鍋(図 2)とは口縁部が直立し、頸部と体部の境界に沈線が施される鍋である(山田ほか 1992)。

美濃では土師質煮炊具の出土自体が限られており、伊勢型鍋や羽釜が数点と内耳鍋がわずかに認められる程度である。美濃は尾張と同様な変遷を辿るのではないかと考えている。

飛騨は調査事例が少なく、江馬氏城館跡の調査がほとんど唯一のため、変遷は不明な点が多い。

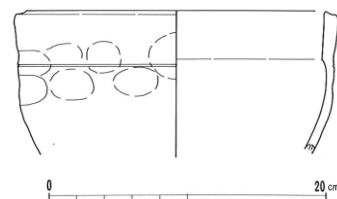


図 2 遠江型鍋

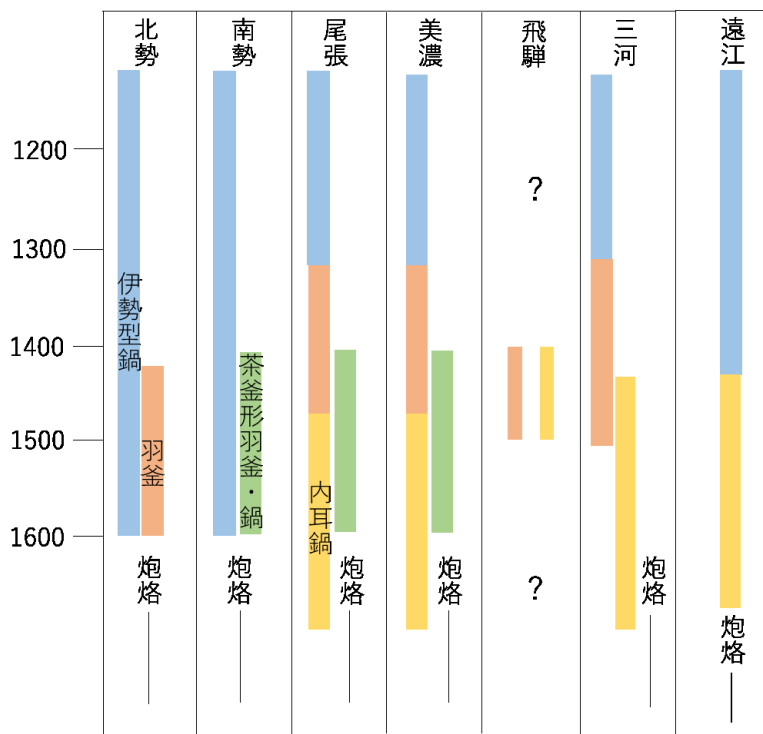


図 3 煮炊具の地域別変遷

では、どのような遺跡からどのような煮炊具が出土しているのか具体的にみていく。表 1 に、今回資料とした遺物が出土した遺跡を「主な煮炊具出土遺跡」として一覧で示した。

図 4 のグラフは、東海地方で煮炊具が器種別にどれくらい出土しているのかを表したものである。凡例の「その他」は、茶釜形と思われるが器種の不明な釜や、底部に三足が付く内耳鍋、石鍋など、煮炊具の中では特殊な器種が含まれる。東海全体で見ると、伊勢型鍋が 21%、羽釜が 33%、内耳鍋が 35% という結果になった。

羽釜 A 類は、尾張での出土例が中心とされてきたが、東海全域で確認することができた。尾張では馬引横手遺跡(一宮市)、土田遺跡(清須市)、阿弥陀寺遺跡(あま市)、尾張国府跡(稲沢市)、下津城跡(稲沢市)など、三河では杉山遺跡(新城市)と吉田城遺跡(豊橋市)でみられる。三重県では下川遺跡(津市)で、岐阜県では塚遺跡(揖斐川町)と芥見町屋遺跡(岐阜市)で確認できた。

羽釜 B 類は、三重県を中心にして尾張と岐阜県で出土している。三重県では、古市遺跡(津市)、六大 B 遺跡(津市)、宮ノ腰遺跡(津市)、ミゾコ遺跡(多気町)、上相田遺跡(松阪市)、伊勢寺遺跡(松阪市)、伊勢寺廃寺(松阪市)で出土している。尾張では、清洲城下町遺跡(清須市)と岩作城(長久手市)、柳が坪遺跡(東海市)で出土している。岐阜県では、大坪遺跡(美濃加茂市)で確認できる。

A 類と B 類が両方存在する遺跡もある。名古屋城三の丸遺跡(名古屋市)と志賀

公園遺跡(名古屋市)、安濃津遺跡群(津市)と楠ノ木遺跡(玉城町)である。

A類が出土した杉山遺跡は、口縁部に焼成前穿孔がある羽釜もみられる。羽釜の口縁部穿孔は三重県中北勢部の遺物でよくみられ、中北勢系独自の特徴として知られている。杉山遺跡の例は中北勢系の羽釜に類似するが、中北勢系の羽釜は今のところ三重県内でのみ確認されている。上野遺跡(四日市市)、伊坂城跡(四日市市)、島貫遺跡(津市)、安濃津遺跡群、下川遺跡、安養院跡(津市)でみられる。上野遺跡と伊坂城跡、島貫遺跡では南勢で作られたと考えられる南伊勢系の羽釜も出土しているが、中北勢系の羽釜の方が多い。杉山遺跡の遺物は中北勢から搬入されたものかもしれない。

半球形の内耳鍋は、清洲城下町遺跡や名古屋城三の丸遺跡、朝日西遺跡(清須市)、志賀公園遺跡など尾張を中心にして吉田城遺跡、城之内遺跡(岐阜市)、重竹遺跡(関市)など三河や岐阜県でもみられる。「く」の字形の内耳鍋は柳が坪遺跡でみられる。柳が坪遺跡では半球形の内耳鍋は確認できなかった。半球形の内耳鍋と、「く」の字形内耳鍋の両方がみられるのは、神明社貝塚(南知多町)と麻生田大橋遺跡(豊川市)、杉山遺跡である。神明社貝塚と柳が坪遺跡は尾張に属している。尾張で「く」の字形の内耳鍋が確認されるのはこの二つの遺跡のみであった。三河からの搬入品と考えられる。

次に、地域ごとに器種について考察する。

三重県内では、中世後期の伊勢の資料のみを考察対象とした。中北勢の遺跡が半数を占めている。器種は、伊勢型鍋と内耳鍋・茶釜形鍋と羽釜・茶釜形羽釜、炮烙がある。ただし、内耳鍋と茶釜形鍋は各1例しか出土していない。伊勢では、特に南勢で伊勢型鍋が煮炊具の主体を占めると言われてきた。これは、図5と図7で伊勢型鍋が半数以上を占めていることから明らかである。

さらに、中北勢と南勢で器種の比率にどれくらいの違いがあるのか示したグラフが図6と図7である。その結果、中北勢と南勢の間にはっきりと違いが生じた。南勢では伊勢型鍋が85%を占めるのに対して、中北勢では46%にとどまった。また、羽釜は南勢では10%しかないのに対し、中北勢では43%を占めている。遺跡によっては、伊勢型鍋を上回るほど羽釜が出土しているところや、羽釜のみ出土する遺跡もあった。また、口縁部に焼成前穿孔がみられる中北勢系の羽釜が一定量見受けられる。中世後期に出現するとされ(伊藤 1996c)、竈ではなく囲炉裏などで使用されたものである。

中北勢系の羽釜は、三重県北部の遺跡ほど顕著に確認できる。茶釜形羽釜や炮烙も存在するが、尾張と比べると少なく、器種の多様性に乏しい。遺跡の性格としては22例中16例が集落である。城館は3例、寺院や中世墓も3例、都市遺跡(港町)が1例で生産遺跡が1例である⁽¹⁾。しかし、遺跡の性格によって明確に

器種の多様性や出土量の多寡が認められるわけではないようである。北畠氏館跡では数点ではあるが、茶釜や十能など他の遺跡ではみられない土師質の製品が存在する。しかし、これは北畠氏館跡が例外と考えた方がよい。

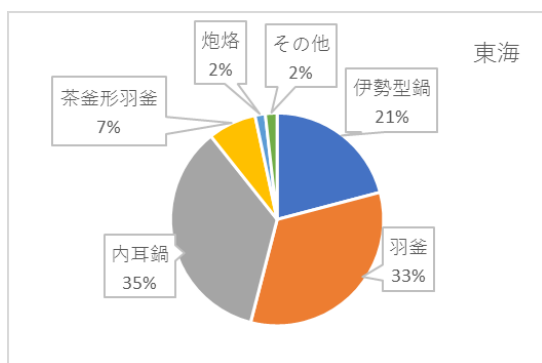


図 4 器種別比率(東海)

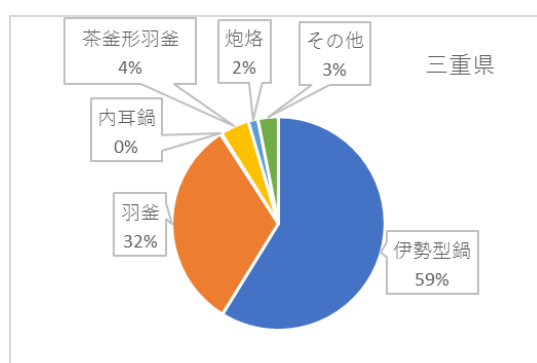


図 5 器種別比率(三重県)

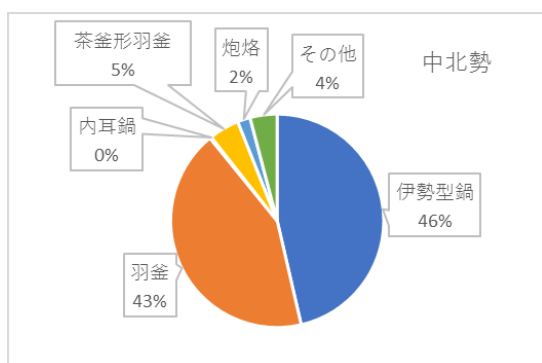


図 6 器種別比率(三重県中北勢)

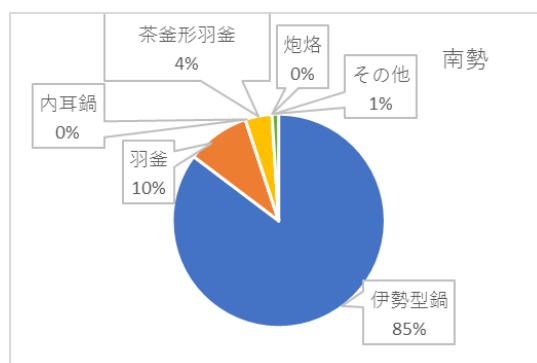


図 7 器種別比率(三重県南勢)

愛知県内では中世後期の煮炊具を出土する遺跡は、尾張を中心として非常に多く存在する。その全てを網羅することは不可能だったため、数種類の器種が出土し、ある程度量もある遺跡を抽出した。煮炊具が出土しているものの、今回の考察対象からは除外した遺跡を含めると、中世後期の尾張の資料はとても豊富である。

器種は、伊勢国と同様に、鍋は伊勢型鍋・内耳鍋・茶釜形鍋、釜は羽釜・茶釜形羽釜、そして炮烙がある。図 8 から分かるように、伊勢型鍋が占める割合は三重県と違って少ない代わりに、内耳鍋が半数を占めている。内耳鍋はほぼ全ての遺跡から出土している。稲沢市の下津城跡では、底部に三足が付いた内耳鍋が 1 点出土している。この三足付内耳鍋は、口径が 26.6 cm で器高が 14.0 cm、底径が 18.4 cm で、三足が付かない大半の内耳鍋と大きさはほとんど変わらない。尾張と三河で器種の比率を比べた結果は図 9 と図 10 に示すとおりである。尾張では羽釜が 36% で、内耳鍋が 49% となっている。三河では羽釜が 5% と少ない一方で、内耳鍋が 71% を占めている。また、三河の方が伊勢型鍋の比率が高くなっ

ている。遺跡の性格は、18 例中 9 例が集落、8 例が城館(城下町含む)、国府と守護所がそれぞれ 1 例である。

そのうち、特徴的な遺跡が神明社貝塚である。神明社貝塚は本研究では集落としたが、他の集落遺跡とは成り立ちが異なる。神明社貝塚は、三河湾に浮かぶ篠島にあり、現在の行政区域では愛知県南知多町に属する。篠島は、鎌倉時代には志摩国答志郡に属し、室町時代は伊勢国度会郡に属した。その後、江戸時代になって尾張国に属するようになった。篠島は伊勢神宮の御厨として干鯛を奉納していたことが、建久年間(1190~1199)の記録に残っているという(山下編 1989)。発掘調査では伊勢型鍋・内耳鍋・羽釜・茶釜形羽釜が出土したが、山茶碗・天目茶碗・播鉢などの瀬戸美濃製品も数十点表採されている。

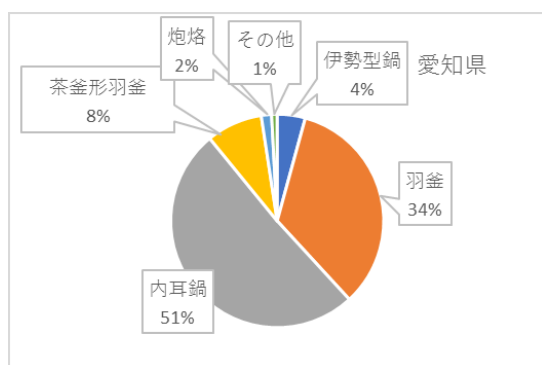


図 8 器種別比率(愛知県)

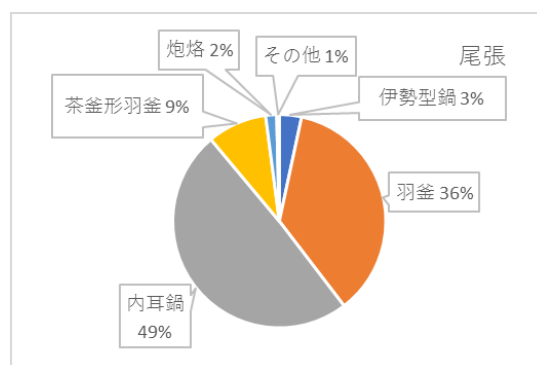


図 9 器種別比率(尾張)

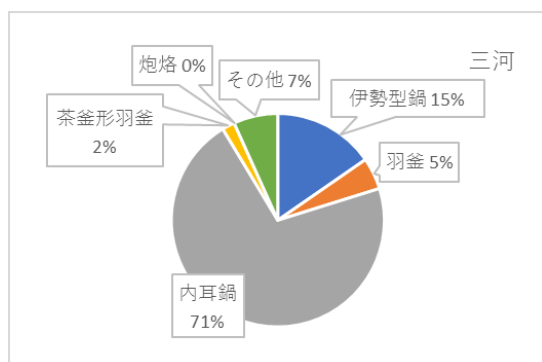


図 10 器種別比率(三河)

岐阜県での土師質煮炊具の出土は三重県や愛知県と比べて少なく、南部に集中している。器種は、鍋・釜の二種で構成される。鍋は伊勢型鍋と内耳鍋、釜は羽釜と茶釜形羽釜があるが、それぞれ数点ずつしか確認できなかった。図 11 が示すように、器種別の比率としては伊勢型鍋と羽釜、内耳鍋がほとんど同じような割合となった。中世前期と思われる伊勢型鍋もわずかではあるが出土していることから、中世前期にも伊勢との交流があったことが想定できる。

出土遺跡の分布や遺物の量は、発掘調査の行われ方に起因するとも思われる

が、各遺跡からの煮炊具の出土自体が少ないため、土師質煮炊具の利用自体が伊勢や尾張、三河と比べて少なかった可能性が考えられる。その代わりに鉄製煮炊具の良好な資料があり、鉄製品の普及が想定できる⁽²⁾。また、岐阜県独自の在産土器というものがみられず、伊勢など近隣からもたらされる煮炊具に頼っていたと考えられる。

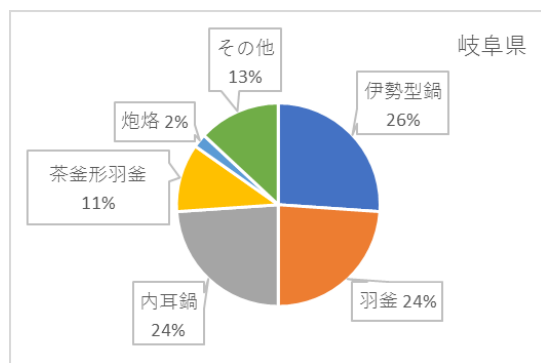


図 11 器種別比率(岐阜県)

註

- (1)「集落」と「中世墓」、「寺院」と「集落」のように複数の性格をもつ遺跡があるが、重複してカウントしているため、遺跡の合計とは合わない。
- (2)「遺跡の調査・報告事例が多くはない中で、金属製品の普及を想定する積極的根拠はない」(尾野 1997)との見方もある。

第 2 節 土器組成

この節では、個々の遺跡における土器組成を比較し、遺跡の性格や立地によって差異が生じるのか考察する。考察対象にした遺跡は、安濃津遺跡群(三重県津市)、伊坂城跡(三重県四日市市)、島貫遺跡(三重県津市)、北畠氏館跡(三重県津市)、清洲城下町遺跡(愛知県清須市)、麻生田大橋遺跡(愛知県豊川市)、南整理遺跡(岐阜県関ヶ原町)である。これらは、多様な器種が一定量出土しており、比較的大規模な遺跡だったと考えられる。

○安濃津遺跡群

安濃津遺跡群は、伊勢湾西岸部に存在する中世の港町の一つである。安濃津は桑名・大湊と並び、三重県における中世の港として特に重要であった。安濃津には、神宮領安濃津御厨があり、伊勢神宮の支配地でもあった。さらに、室町期の伊勢守護や国人領主の長野氏といった領主権力との関わりもあったと言われて

いる(伊藤 1997)。

安濃津遺跡群の土器組成は、図 12 のようになっている。安濃津遺跡群全体では土師器皿類が全体の 60%を超えて最も高く、次いで土師質煮炊具が全体の 25%ほどを占める。土師器皿類と煮炊具で 90%近くを占め、土師器が圧倒的に多いことが分かる。瀬戸や常滑の陶器類は 10%程度で、貿易陶磁器は 1%ほどである。南伊勢系の土師器と中北勢系の土師器の割合は煮炊具で 2:1、皿類で 8:5 である(伊藤 2007)。

しかし、個々の遺構単位で見ると、安濃津遺跡群全体の結果とは差があることが分かる。土坑 SZ60 は東西 7.5m、南北 4m の長方形で、完形に近い羽釜も含まれていた。この土坑から出土した土器は中北勢系の土師器が中心で、南伊勢系の遺物はほとんどなく、15 世紀後半には埋没したと考えられている。土坑 SK175、SK230 も同じく 15 世紀後半までには埋没していたとされる。土坑 SK229 は直径約 5.0m の不整形円形である(伊藤 1997)。SK230 からは南伊勢系の煮炊具が 40% 弱出土し、中北勢系の煮炊具は少ない。この割合は皿類でも同様の結果となっている。これと反対に、中北勢系の煮炊具と皿類が多いのが SZ60 である。そして、SZ60 は貿易陶磁器が最も多いことも特徴的である。

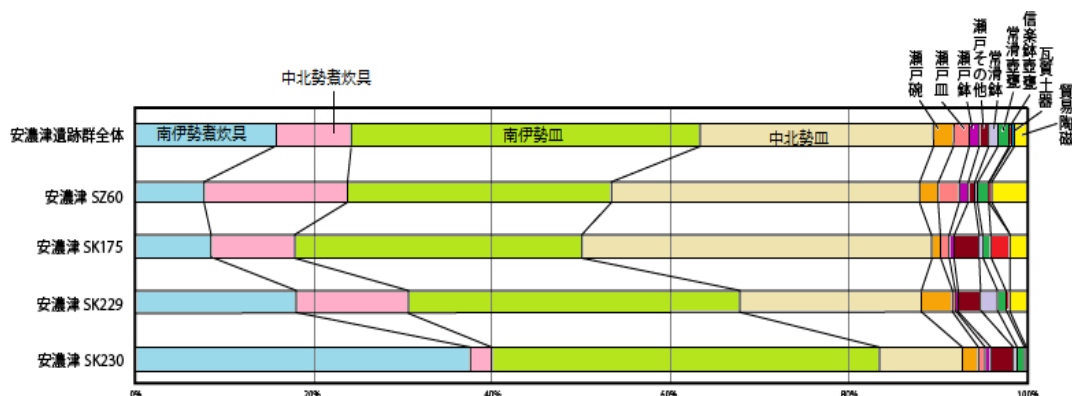


図 12 安濃津遺跡群の土器組成

○伊坂城跡

伊坂城跡は、朝明川北岸の丘陵上から東に派生する尾根上に立地する比高約 40m の戦国時代の城館である。主郭は約 45m 四方で、周囲には高いところで約 2.5m の土塁がある。城は 15 世紀後半から末に構築され、16 世紀前半に最盛期を迎えたが、16 世紀中頃から後半に衰退していき、16 世紀末には廃絶したという。伊坂城跡の土器組成は図 13 のとおりである。全体では土師器が最も多く、瀬戸美濃製品と常滑製品が続く。伊坂城跡と同じく城館である多気北畠氏遺跡(津市)の土井沖地区では 9 割が土師器で占められ、陶器は 1 割にも満たないが、伊坂城跡では陶器の割合が高いのが特徴である(竹田編 2003)。陶器の産地であ

る尾張と距離が近く、流通ルートが直結していたためとされる。土師器に注目すると、煮炊具が6割、皿類が4割となっている。羽釜や天目茶碗、鉢類、常滑の甕などの日常品が全ての区画で出土していることから、臨時的な施設ではなく、恒常的な生活の場であることが分かる。

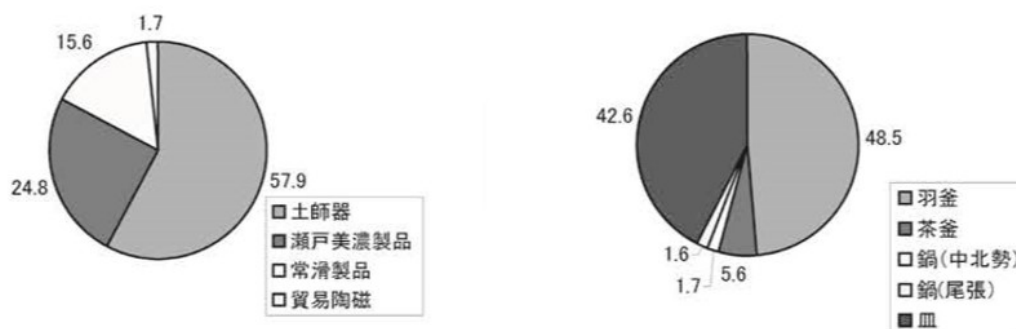


図 13 伊坂城跡の土器組成と土師器の器種構成

○清洲城下町遺跡

清洲城下町遺跡は、木曾川の分流である五条川の中流域に所在する。出土遺物は数十万点を数える。戦国時代から江戸時代だけではなく、古代や中世の遺構や遺物も多く確認される複合遺跡である。清須城が築かれたのは応永年間(1394~1428)とされるが、1478年頃に尾張守護代の織田敏定によって、守護所が下津から移転されて以来、尾張の中心的都市として発展してきた。1609年に名古屋城築城が決まると、城下町を全て名古屋に移転した。この「清須越」は1614年頃に完了したとされ、これ以降は宿場町として発展し、それ以外の領域は新田畑などに開発された(鈴木ほか1990)。ここでは、1993(平成5)年に調査された地区(93D区)の組成を参考に考える。

93D区で確認された戦国期の遺構は溝2条、土坑2基である(蟹江ほか1996)。そのうちの溝1条は、上層が削平されているにもかかわらず、幅7.86mで深さは1.20mあった。断面は箱形に掘削され、溝とその周辺から木杭も確認されている。この溝は区画溝と考えられており、大型方形区画の一部である可能性が高い。城主もしくはそれに次ぐ地位の人物の屋敷地があったと考えられている。

93D区がある地区(田中町北部地区と呼ばれている)は、土師器皿が他の地区に比べて多いことが分かっており(図14)、このことから身分の高い層が生活した空間と考えられる。

土師器の鍋と釜の器種別の内訳は次のような結果となっている。口縁部残存率で内耳鍋が 95.0%、羽釜が 1.6%、茶釜型鍋・釜が 3.4%、破片数で内耳鍋が 98.6%、羽釜が 0.7%、茶釜型鍋・釜が 0.7%である。炮烙の出土はない。瀬戸美濃産

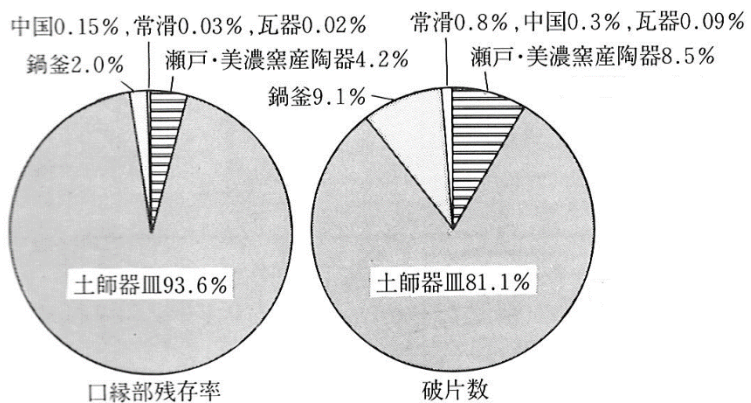


図 14 清洲城下町遺跡(93D区)産地・材質別組成

の椀の中では天目茶碗が圧倒的に多く、口縁部残存率で 68.1%、破片数で 76.0%を占める。

次に、北畠氏館跡、島貫遺跡、麻生田大橋遺跡、南整理遺跡の土器組成を比較した結果、以下のとおりとなった(図 15)。

「土師質煮炊具」は鍋と釜、「土師器供膳具」は皿、「土師器貯蔵具」と「陶器貯蔵具」は甕と壺、「陶器供膳具」は皿と椀、「陶器調理具」は播鉢、「磁器」は皿と椀、「瓦質土器」は瓦質の椀と皿を含む。なお、「陶器煮炊具」の出土はなかった。

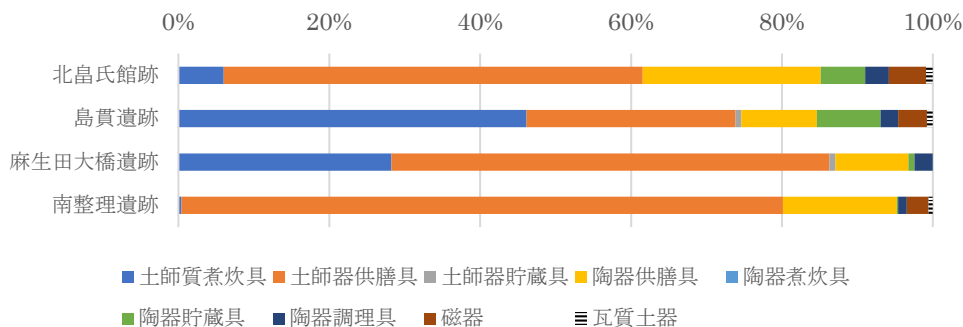


図 15 土器組成

北畠氏館跡は、室町時代に伊勢の国司であった北畠氏の館跡である。館跡の造成時期は明確ではないが、15世紀前半には城下が形成され、織田氏の侵攻により滅亡する戦国時代末まで機能したと考えられている。北畠氏に関連する城館跡や寺院跡などを総称して多気北畠氏遺跡と呼ばれており、館跡はそのうちの一つである。多気北畠氏遺跡は、北畠氏の南勢支配の拠点であり、六つの峠で遮られた天然の要害でもある(熊崎 2015)。

島貫遺跡は、神宮領嶋抜御厨があり、早い時期から神宮領として存在したとこ

ろである。遺跡の南側を雲出川が流れ、約 4 km 北には安濃津遺跡群がある。河川あるいは海の水上交通路だけではなく、陸上交通路も存在していたようで、街道沿いの宿場町としての機能も想定されている(伊藤・川崎 1998)。

麻生田大橋遺跡は東西約 120m、南北約 130m の、縄文時代から江戸時代までの複合遺跡である。調査の結果、縄文時代晩期後葉から弥生時代前期にかけての土器棺墓 133 基をはじめ、弥生時代中期以降の方形周溝墓や古墳時代、古代、中・近世の遺構が検出された。豊川右岸の段丘上に位置し、豊川までの直線距離は約 1.25 km である(安井 1991)。今回は、室町時代後期から戦国時代の遺物を資料とした。

南整理遺跡からは、縄文時代草創期から江戸時代末までの遺物が出土している。南整理遺跡がある関ヶ原町大字野上は、古代には壬申の乱の舞台となった地で、行宮が設置されたと言われている。その後、美濃国西端部に不破関や美濃国府などの官衙や有力豪族の寺が造営された。中世には野上宿として繁栄し、近世には中山道が整備された、まさに交通の要衝である(三輪 2000)。

以上、全ての遺跡で土師器が全体の 60% 以上を超える土器組成になることが分かった。北畠氏館跡では土師質煮炊具が 6%、土師器供膳具が 55% で土師器が 61% を占める。次いで陶器供膳具が 24% で、土師器と陶器の供膳具を合わせて 79% を占める。島貫遺跡では、土師質煮炊具が 46% で最も多く、土師器供膳具が 28% と続く。土師器は 74% を占める。陶器供膳具は 10% で、土師器と合わせて供膳具は 38% となった。麻生田大橋遺跡では、土師質煮炊具が 28% に対して土師器供膳具が 58% で最も多く、土師器が 86% を占める。北畠氏館跡よりも土師器が多いという結果になった。陶器供膳具は 10% である。南整理遺跡は、土師器供膳具が他の遺跡よりも圧倒的に多い 80% を占めるが、土師質煮炊具は 0% である。陶器供膳具は 15% で、土師器供膳具に次いで多い。

島貫遺跡を除いた他の三つの遺跡では、土師器供膳具が最も多いことが分かった。土師器供膳具、いわゆる「かわらけ」は一般的に饗宴で使用され、一度限りで廃棄された器と言われている。したがって、これらの遺跡では、ある程度の規模で饗宴を催すことができる経済的に裕福な階層が生活していたのではないだろうか。麻生田大橋遺跡を除く三つの遺跡で磁器が出土していることから、上位の階層に位置する者がいたことを推定できる。

島貫遺跡は神宮領として存在していたことから、宗教的な非日常的儀礼の伝統が受け継がれ、遺物の組成にも表れるのではないかと考えていたが、土師器供膳具より土師質煮炊具の方が多くという結果になった。島貫遺跡の辺りは陸上交通の要衝としての機能もあり、中世後期には街道が整備されて、周辺には京都の公家をもてなすことができる程度の施設が備わっていたとされ、街道沿いの

宿場町としての機能があったと考えられている(伊藤・川崎 1998)。煮炊具が多いのは、大勢の人の食事を用意するためにたくさんの煮炊具が消費されたからであろう。陶器貯蔵具の割合も他の遺跡と比べて多いことから、長期的な日常生活空間が存在したと考えられる。

北畠氏館跡、麻生田大橋遺跡、南整理遺跡にも、川や街道が遺跡の近くを通るという共通点がある。川や街道は海上交通と陸上交通にとって重要であり、これらの遺跡の周辺は人や物の交流が盛んだったのではないだろうか。特に、北畠氏館跡と南整理遺跡はその土地の政治や行政の中心となった場所であり、煮炊具が少ないという点も共通している。かわらけを用いるような饗宴を行う上位の階層がいたと思われる。

第3節 遺物の口径

続いて、遺物の口径に着目する。グラフに表すことができる資料は限られ、比較対象にできた遺跡は少ないが、ある程度遺跡ごとの傾向を掴むことができるのではないかと思う。図16～18は、清洲城下町遺跡と名古屋城三の丸遺跡、麻生田大橋遺跡の内耳鍋の口径を表したグラフである。なお、清洲城下町遺跡のグラフは口縁部残存率を基にしたものであり、その他の遺跡のグラフは遺物観察表を基に口径と個体数の関係を算出したものである。

清洲城下町遺跡の内耳鍋は26～27 cmが最も多く、次いで24～25 cm、そして28～29 cmと続く。24～29 cmの内耳鍋が圧倒的に多いことが分かる。34 cm以上の内耳鍋はわずかしかない。全て半球形の内耳鍋である。

名古屋城三の丸遺跡の内耳鍋は24～25 cmが最も多い。次いで21 cm以下が多くなっている。そして、26～27 cm、22～23 cmと続く。名古屋城三の丸遺跡では、大小4種類の内耳鍋が使われていたようである。清洲城下町遺跡と同じく、全て半球形の内耳鍋である。

清洲城下町遺跡と名古屋城三の丸遺跡は半球形内耳鍋のみであるが、麻生田大橋遺跡の内耳鍋には、半球形内耳鍋と「く」の字形内耳鍋の両方がある。東海地方の遺跡全体では半球形の方が多いが、麻生田大橋遺跡では「く」の字形の方が多かった。麻生田大橋遺跡の「く」の字形内耳鍋は、23 cm以下の小型品が主流である。24 cm以上のものはわずかしなく、30 cm以上のものはない。半球形の内耳鍋は24～31 cmのものだけである。結果として、「く」の字形のものと半球形のもので口径が明確に分かれた。鍋の形によって消費者側が使い分けをしていたか、あるいは生産者である工人が規格の違う製品を生産していたか、そもそも工人集団が異なっていたなど複数の可能性が考えられる。

図 19 は北畠氏館跡の伊勢型鍋の口径を示したグラフである。21 cm以下の鍋が最も多く、他は平均的で 22～35 cmの口径分布にあまり差はなかった。また、36 cm以上のものはなかった。

それに対して、島貫遺跡の伊勢型鍋は北畠氏館跡では見られなかった 36 cm以上の鍋が最も多い(図 20)。次いで、26～27 cmの鍋が多かった。この結果から、島貫遺跡では大型の鍋が使われていたと考えることができる。羽釜は 28～29 cmが最も多いが、ほとんどの羽釜が 22～31 cmの間に収まる。

伊坂城跡の羽釜は 23 cm以下に集中している(図 21)。島貫遺跡の羽釜が大型だったのに対して、伊坂城跡の羽釜は小型である。しかし、伊坂城跡と島貫遺跡の羽釜は共に中北勢系の羽釜とされていることから、この二つの遺跡の羽釜は同じ工人集団によって生産された可能性が高く、口径の違いは工人集団の違いを示すものではないと分かる。工人集団が規格の異なる製品を生産し、消費者側が選択した結果ではないだろうか。複数の商品規格があって消費者が選択できたとするならば、小型の羽釜で煮炊きをしていたと思われる伊坂城跡では、大人数が生活していたわけではなさそうである。伊坂城跡が恒常的な城であったとは言え、やはり城館である以上、最低限の人数が生活していただけなのだろう。

反対に、島貫遺跡は大型の羽釜での煮炊きが必要とされる環境だったと言える。第 2 節で島貫遺跡の土器組成について触れたが、煮炊具が全体の 46%を占めて最も多かった。遺跡の周辺は陸上交通の要衝で、街道沿いの宿場町としての機能があったことを踏まえると、大勢の人の食事を用意するためにたくさんの大型の煮炊具が消費された様子がうかがえる。陶器貯蔵具の割合も他の遺跡と比べて多いことから、長期的な日常生活空間があったと推定できる。

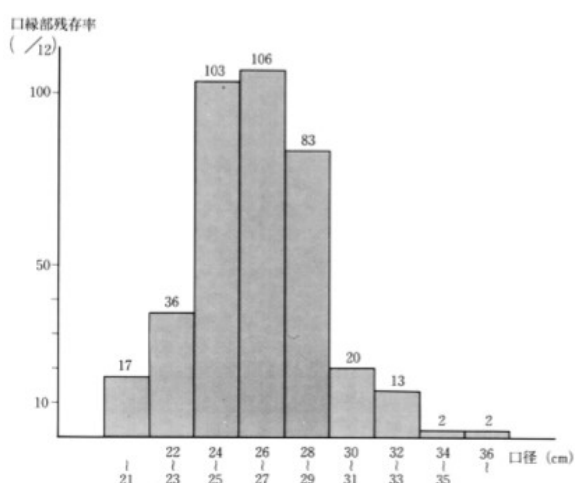


図 16 内耳鍋の口径(清洲城下町遺跡)

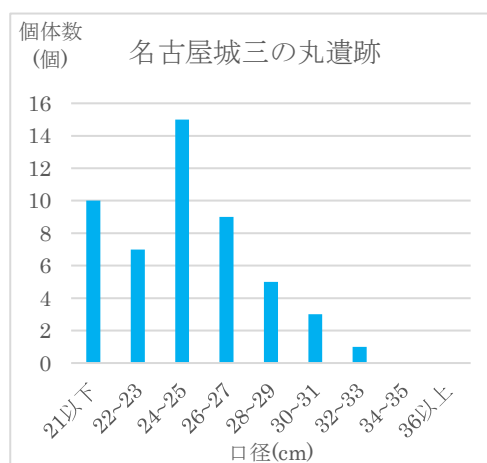


図 17 内耳鍋の口径(名古屋城三の丸遺跡)

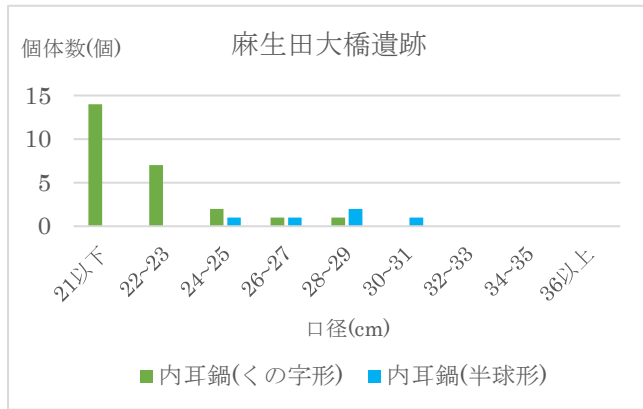


図 18 内耳鍋の口径(麻生田大橋遺跡)

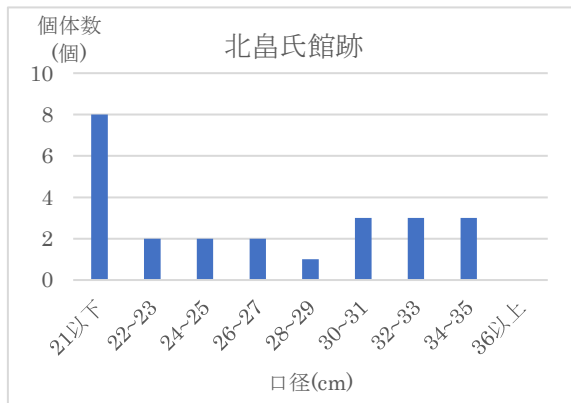


図 19 伊勢型鍋の口径

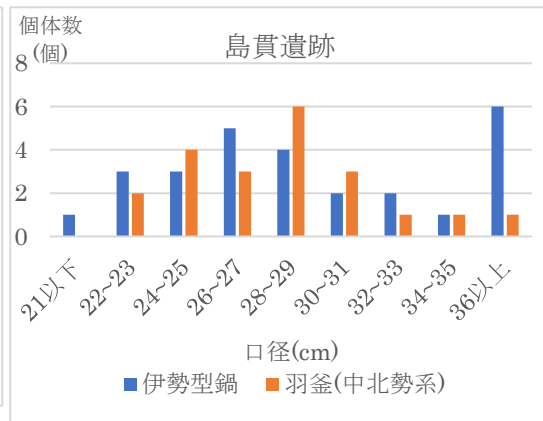


図 20 鍋・釜の口径

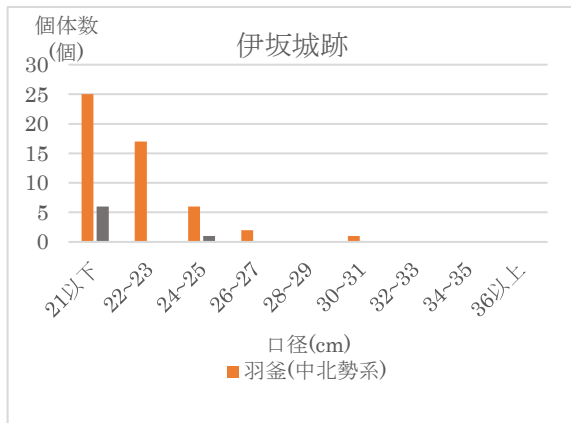


図 21 釜の口径

第3章 鉄製煮炊具

第1節 鉄製煮炊具の概要

第3章では、鉄製の鍋や釜について考察し、土師質煮炊具との比較を行う。中世においては鉄製の鍋や釜も存在し、使用されていたと考えられている。しかし、中世後期に至っても土師質煮炊具が盛んに使用されていたことを示すかのように、それらの遺物が多数出土していることはこれまで述べたとおりである。

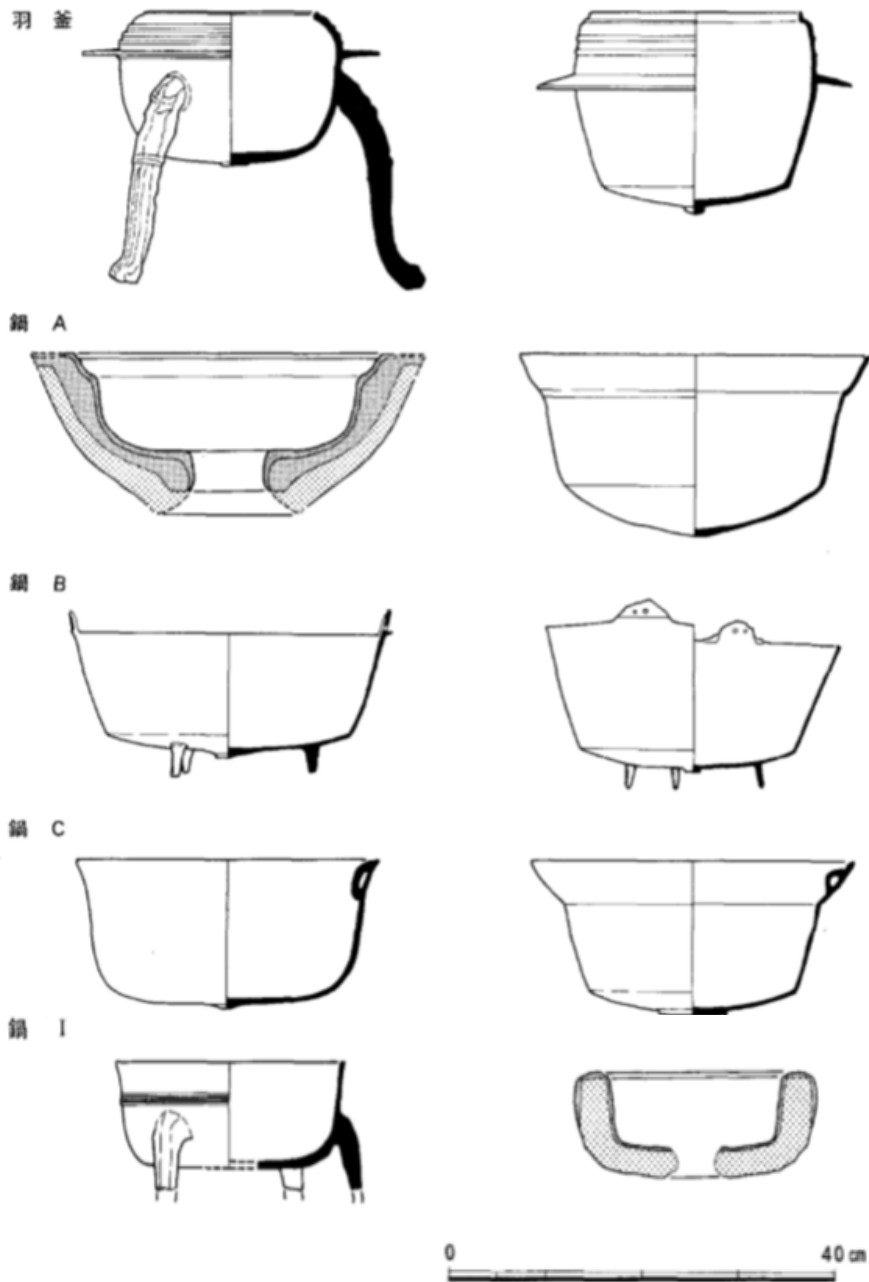


図 22 鉄製煮炊具の分類

土製煮炊具は近世以降、安価な鉄製の鍋や釜、陶磁器の普及によって淘汰されていった。鉄製品の普及は、戦国時代までのような刀剣や甲冑などの武器や武具の需要が減少したために、農具や生活品の需要に対応しなくならなくなったことも影響しているとされる(足立 1987)。とはいえ、土製品が全くなくなっただけではなく、現在でも土鍋を使うことはあるものの、中世までと比べるとその存在感は薄れていると感じる。

鉄製煮炊具は、実用性重視で大量生産されて不特定多数に供給されたもので、コストも低かったという(五十川 1992)。鉄製品は破損すると回収して再利用するため、発掘調査で出土する例は少ない。そして、製品の回収率には地域差があり、江戸などの大都市ほど出土が限られるという。

五十川伸矢は、鉄製鍋を形態によって分類し、地域性を見出した。すなわち、口縁に蓋受けの屈曲がつく形態のものを鍋 A、弦をつけるための穴の開いた吊耳部分を口縁に付加し、底部に短い三足がつくものを鍋 B、吊すための耳が内側につく、いわゆる内耳鍋を鍋 C、古代の鍋で口縁がまっすぐ立ち上がる形態のものを鍋 I とした(図 22)。

鍋 A は出土例・伝世品ともに少ないが、九州・山陽・畿内・北陸で出土し、西日本に分布するという。12 世紀から中世末まで使われた。岩出遺跡群所り垣地区⁽¹⁾(三重県)や草戸千軒町遺跡(広島県)出土の鍋がこれに当たると五十川は指摘している。

鍋 B は 14 世紀から 16 世紀に盛行し、一乗谷朝倉氏遺跡(福井県)や浪岡城(青森県)などで出土例があるという。一乗谷朝倉氏遺跡では、大量に出土する陶磁器から食生活の復元がされている。ここでは、庶民も普及品の漆器の椀や輸入された染付、白磁の皿で食事をしていた(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998)。食器類の傾向は武家屋敷地区でも町屋地区でも大幅に変わることはなく、日常の食生活に差はなかったものの、土師器皿の量は大きく異なる。朝倉館が最も多く、上級武家屋敷地区、中級武家屋敷地区・町屋地区の順に少なくなっていく。

一乗谷朝倉氏遺跡には竈がなく、囲炉裏の他に川原石を積んだ炉や笏谷石製の置き炉で煮炊きをしていた。煮炊きには鉄鍋が 1 種類で鍋の大小があるのみだったと言われている。また、土製の鍋や釜がなく、鉄鍋のみだった。しかし、ここでも鉄鍋の出土は十数点にとどまっている。図 23 は一乗谷朝倉氏遺跡出土の鉄鍋で、口径が 36.8 cm である(福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988)。この遺跡では五徳も出土している。脚の一部から推定復元されたものであるが、鍋 A と鍋 B は五徳の上に載せて使うというので、こうした五徳に鍋を載せ、囲炉裏で煮炊きをしたと思われる。図 24 の鉄鍋は口径 35.0 cm・器高 14.2 cm である(福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館 1998)。

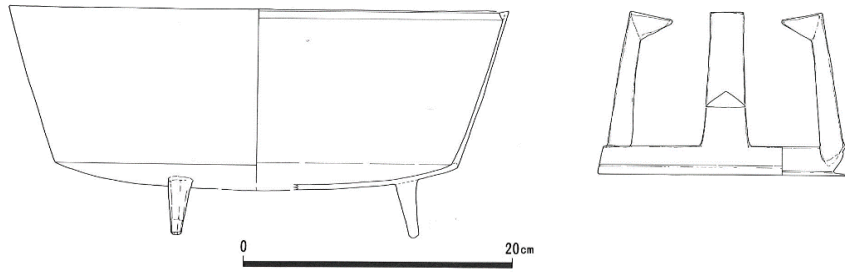


図 23 一乗谷朝倉氏遺跡の鉄鍋と五徳

鍋 C は関東から東北での出土が目立つ。五徳の上に設置して使うのではなく、吊して使う点が鍋 A や鍋 B と異なる。五徳の出土例は西日本に偏っており、大宰府(福岡県)や初田館跡(兵庫県)、根来寺(和歌山県)などから出土している。



図 24 一乗谷朝倉氏遺跡の鉄鍋②

西日本では鍋 A が主体だが、東日本では鍋 C が生産・消費されていた。14 世紀に鍋 B が西日本に出現し、鍋 A に取って代わった。中世後半から近世に全国的に鍋 B が主体となり、鉄製羽釜と共に使用するようになったという。こうして、16 世紀中頃に西日本では土製煮炊具が消失していったと五十川は述べている。

鉄製羽釜は 14 世紀中頃から中世後期の資料が近畿で見られる。特に奈良県や大阪府南部、和歌山県紀ノ川中流域の社寺に伝世しており、湯立て神事に使われたと考えられている。根来寺や堺環濠都市遺跡(大阪府)で出土例がある。鉄製羽釜は畿内とその周辺で生産・消費され、東限は穀見塚前遺跡(岐阜県)とされる。穀見塚前遺跡の釜については第 2 節で詳しく述べる。

以上、鉄製煮炊具に関する概要を述べた。一部の遺跡を除き、ほとんどが近畿地方から西の遺跡で鉄製煮炊具の出土や伝世品が見られる。12 世紀には鉄製煮炊具の生産と消費が確立していた中で、伊勢や尾張を中心に東海地方では中世後期に至っても土師質煮炊具の出土が際立っている。先に述べたように、鉄製煮炊具は回収して再利用されたことが考えられ、出土例がないからといって東海地方で鉄製煮炊具が使われていなかったわけではない。しかし、土師質煮炊具の出土が多いことは、中世後期に至っても土師質の製品が依然としてよく利用されていたことを示している。

註

- (1) 三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター1990『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報VI』では、「宮地遺跡」と呼称していた。稲本賢治 1992『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第4分冊 蚊山遺跡所り垣地区』において、広大な遺跡範囲を持つ蚊山遺跡の一部であるという理解のもと、調査区が所在する主な小字名をとり、「蚊山遺跡所り垣地区」と改名された。さらにその後、伊藤裕偉 1996b『岩出地区内遺跡群発掘調査報告一度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査一』において、蚊山遺跡から岩出遺跡群に改称された。

第2節 鉄製煮炊具出土事例

では、東海地方での鉄製煮炊具の出土事例から、この地域の鉄製品と煮炊具について考えたい。現在のところ、東海地方において鉄製煮炊具が出土しているのは10遺跡である。三重県では、三宅西条城跡(鈴鹿市)で1例、多気北畠氏遺跡(津市)で3例、岩出遺跡群所り垣地区(玉城町)で2例、阿形遺跡(松阪市)で1例が確認されている。愛知県では、清洲城下町遺跡(清須市)で2例、志賀公園遺跡(名古屋市)で1例、吉田城遺跡(豊橋市)で1例がある。岐阜県では、穀見塚前遺跡(郡上八幡市)で2例、櫛原村平遺跡(揖斐川町)で9例、重竹遺跡(関市)で1例出土している。

三宅西条城跡(鈴鹿市)は、錫杖ヶ岳に端を発する中ノ川の右岸に接する標高44mほどの丘陵上に位置する。北は中ノ川、東西は比高20mほどの崖、南は比高15mほどの谷が入り込む地形となっている。土塁や空堀などの明瞭な遺構は残存せず、城の創建と廃絶に関しては不明点が多い。出土した鉄製品(図25-1)は室町時代の遺物と考えられている。内径が26cmほど、外径が28cmほどの円環で、断面は1×0.5cmの長方形であり、用途は不明と報告されている(三重県教育委員会1983)が、鉄鍋の「つる」の部分だと思われる(伊藤1993)。

鉄鍋のつるだとすると、断面が長方形より円形の方が持ちやすいのではないかと感じるが、つる以外に適当な用途を見出せないので、先学の見解に従っておく。鉄鍋のつるの他には土師器皿、土師器鍋、常滑産と瀬戸産の陶器、江戸時代のものかと思われる磁器、釘、古銭(元豊通宝か)などが出土している。

多気北畠氏遺跡(津市)では、鉄製煮炊具が館跡から1例(図25-3)と大蓮寺調査区から2例(図26-1,2)出土し、計3例の出土が確認されている。館跡の例は鉄鍋の口縁部片で、口縁部内面が内側に突出することから、五十川分類の鍋Aに当てはまる。大蓮寺調査区の例も鉄鍋の口縁部片だが、2例とも頸部を持たず、五

十川分類には当てはまらない。

岩出遺跡群所り垣地区(玉城町)は、三重県と奈良県の県境にある大台ヶ原山付近に源を発し、多気町や度会郡を通過して伊勢湾に注ぐ宮川の左岸段丘面に立地する。広大な岩出遺跡群の一部である。岩出遺跡群では、旧石器時代から中近世に至る遺跡が複合的に確認されている。かつて蚊山遺跡と称されていた所り垣地区などの範囲内では、鎌倉時代と室町時代の遺構・遺物が多い。鉄鍋は土坑から出土している。共伴遺物はない。そのうち 1 例は口径 26 cm の鋳造品である(稲本 1992)。口縁部の屈曲が強く、五十川分類には当てはまらない(図 25-2)。

阿形遺跡(松阪市)は、約 60,000 m²にも及ぶ広大な遺跡である(福田 1992)。弥生時代後期に属する遺構と中世を中心とした遺構を検出した。事業による削平を受ける 3,500 m²を対象とした発掘において、室町時代後期の土坑(SK74)から鉄鍋が出土した。直径は約 50 cm で、大型の鉄鍋と考えられている。残りが悪いが、鏝のようなものが付くという。SK74 は隅丸長方形で、300×180 cm、深さ 70 cm である。鉄鍋の他に、土師器皿が出土した。口縁の大きさが同じようなものを何枚も重ねた形で出土し、口径 10 cm 以上の大皿・8 cm 台の中皿・6 cm 台の小皿の 3 種類に分けられる。枚数が推定算出されており、大皿が 32.6 枚・中皿が 73.7 枚・小皿が 28.9 枚という結果になっている。算出できなかった破片が 1,442 g で、中皿換算にすると約 62 枚分になるという。これらの土師器皿は、灯明皿として使用したと思われるススが付着したものが多数ある。さらに、底部内面に「乾」「良」「坤」などの墨書がみられるものもあり、祭祀後の一括廃棄土坑と考えられている。

祭祀に用いたと考えられる土師器皿と鉄鍋が共伴していたことは興味深い。前述のように、神社での祭祀の際に湯を沸かすために鉄釜が用いられる例があるようだが、阿形遺跡のものも鍋ではなく釜で、「湯立て神事」のような祭祀に使用された可能性がある。

では、儀礼ではどれくらいのかかわりが消費されるのだろうか。正式な儀式では、一人 50 枚ほどかわらけを使うらしく、100 人いたら一度に 5,000 枚廃棄されることになる(手塚 2007)。かわらけの痕跡から儀礼の内容を明らかにするのは困難なため、阿形遺跡でどのような儀礼が行われたかは分からず、目安の数字となるが、土師器皿の枚数だけで考えれば、規模が小さめの儀式だったということになるだろう。

しかしながら、儀式で一度に 5,000 枚のかかわりが消費されたとなると、主催者側にとっては大変な出費だったのではないだろうか。16 世紀の焼き物の値段については小野正敏が示している。かわらけと炮烙が 1 個 1 文前後で、挿鉢がかわらけ 30 個分、鉄の菜鍋がかわらけ 60 個分で、鉄の三升鍋がかわらけ 120

個分だという(小野 1991)。当時の大工の作料が一人一日 100~110 文だったというから、鉄鍋は安くはなかったことになる。かわらけと焙烙など土師質製品は安かったようだ。土師質鍋や釜も同じくらいの値段だったと考えられる。阿形遺跡の鉄鍋もしくは鉄釜は、室町時代後期のものと思われるので、量産化されていなければ、もう少し値が張った可能性もある。つまり、阿形遺跡には経済的に裕福な層がいたと推定できる。

清洲城下町遺跡(清須市)では、ススが付着した鉄製品が出土し、鑄造品の鉄鍋と推測されている。また、リング状の鉄製品も出土している(図 26-3,4)。鉄製品自体は半分欠損しているが、土師質内耳鍋の内耳に付くものと考えられ(鈴木ほか 2013)、土師質内耳鍋を吊して囲炉裏にかけるためのものと思われる。この鉄製品は内耳鍋の利用法を考える貴重な資料である。内耳鍋は関東・甲信地方、東海地方に主体的に分布する(足立 1987)ので、囲炉裏の地域圏もこれらの地域に重なるだろう。

志賀公園遺跡(名古屋市)は、弥生時代中後期・古墳時代中後期・古代から中世・戦国・近世の遺構が残る複合遺跡である。昭和初期には既に遺跡として認識されており、都市部の遺跡としては珍しく破壊されずに残っている(永井ほか 2001)。出土したのは外面にススが付着する鉄鍋 1 点である(図 25-4)。江戸時代の遺物と共伴していることから、近世のものと報告されている。

吉田城遺跡(豊橋市)は、古代以来交通の要衝である豊川の渡河地点に位置し、奈良時代・戦国時代・江戸時代の遺構を検出している。包含層から鉄鍋の口縁部が出土した(図 26-5)。口縁部が水平で、屈曲が強い。他に、中世の山茶碗や貿易陶磁器があるが、関連する遺構は確認できていない(山田ほか 1992)。しかし、鍋や碗などの遺物が出土していることから、この土地が生活の場として利用されてきたことは確かである。

穀見塚前遺跡(郡上八幡市)では、地下約 1m から鎌倉時代と考えられる大甕と釜・鍋が発掘された。甕は常滑産で、原形を保ち、口径約 40 cm・高さ約 60 cm である。方形の台石の上に載り、7 個の石で支えられていた。そして、甕から約 1m 離れた場所から、鉄製の内耳釜と鍋が重なったまま発見された。内耳釜は口径 32 cm(図 27)、鍋は口径 36 cm である(太田編 1960)。遺跡の周辺には、弥生時代から鎌倉時代の住居跡をとまなう集落があったようである。祭祀遺構とは考えがたいが、釜と鍋が重なっていたことや、甕が台の上に載せられ、石で支えられていたことがどのような意味を持つのかは不明である。台所用品として使っていたものではないかと考えている。

榎原村平遺跡(揖斐川町)と重竹遺跡(関市)の資料は詳細不明であるが、重竹遺跡では鍛冶屋敷跡が見つかっている。

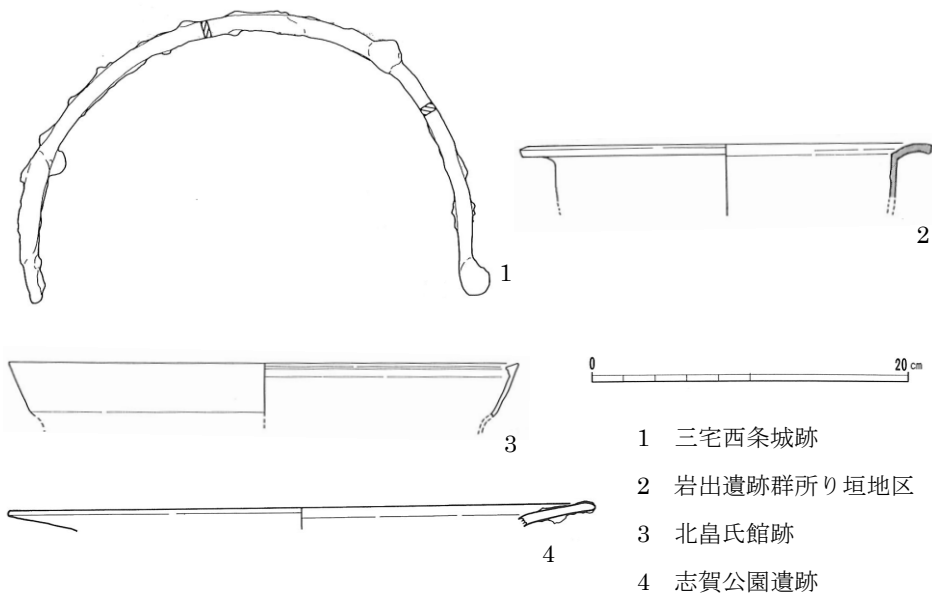


図 25 東海の鉄製品①

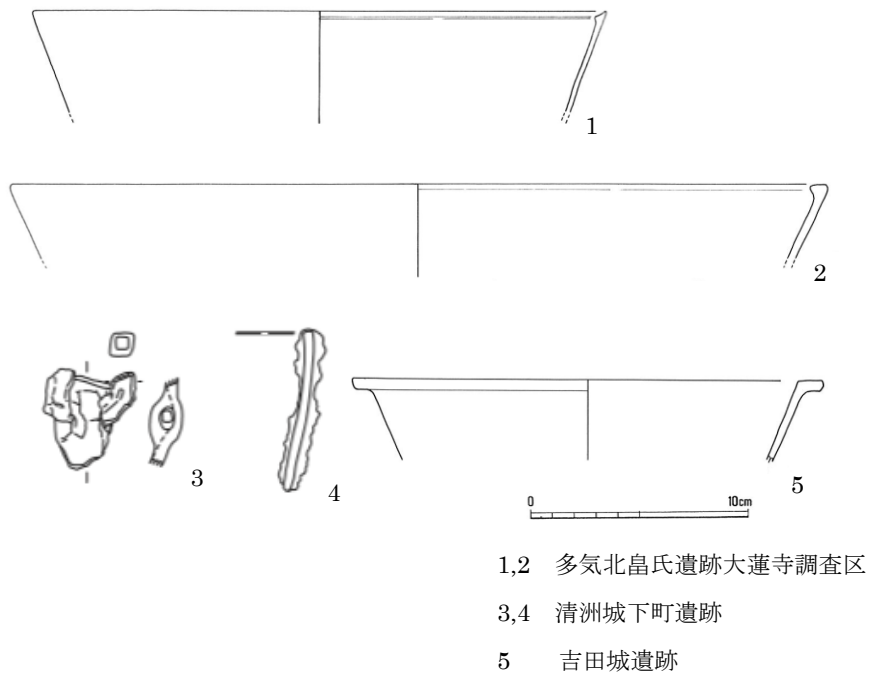


図 26 東海の鉄製品②



図 27 穀見塚前遺跡の釜

第3節 鉄製煮炊具と土師質煮炊具

以上、東海地方で出土した鉄製煮炊具について概観した。中世後期の資料だけでなく、中世前期や近世の資料も含まれるが、鉄製煮炊具の出土に限られる中で貴重な出土例として取り上げた。

三重県や愛知県では土師質煮炊具の出土が目立つため、それと比べると鉄製煮炊具の出土は極めて少ない。一方、岐阜県では三重県や愛知県と比べると、土師質煮炊具の出土が少ないが、鉄製煮炊具の出土はわずかに多い。

煮炊具の普及率が違う要因の一つとして考えられるのは、岐阜県が内陸部に位置することである。土師質のものと鉄製のものでは、流通方法や経路に違いがあったのではないだろうか。土師質製品と鉄製品では、それぞれに別の工人集団が存在したはずである。土器は縄文時代から人々の手によって地域ごとに特色あるものが作られてきたが、鉄製品は地域的あるいは時期的な形態変化が土器のように多様ではない。材料となる鉄を入手し、専門的で特殊な技術が必要な鉄製品を製作するのは誰でもできることではなかったということだろう。朝岡康二は、「金属器は特殊な技術を身につけた専門の職人集団の手によるもので、そう簡単に技術の拡散は生じないと思われる」と述べている(朝岡 1993)。鉄製の鍋・羽釜が交易品としてもたらされ、それをもとにした食習慣ができあがっているにもかかわらず、製造技術は全く伝播しないことは世界的に見ても少なくないという。

交易品ならば、生産地から各地域への供給が安定していないと日常生活において不足が生じてしまう。交易品だけでは不十分となった場合、自分たちで賄おうと思っても職人がおらず、技術の伝播もない状態の地域では、鉄製品の補完品として土師質の鍋や釜を使っていた可能性がある。これは、土師質煮炊具が鉄製品の補完品であるという従来からの見解とも整合的だが、単なる鉄製品の補完品としての土器が中世後期になって多様に変化するのだろうか。

全国的にみると、山形から福島の一帯を除く東北のほぼ全域と北陸、本研究で取り上げている美濃と飛騨は、土製煮炊具がほとんど確認されていない空白地帯となっている(浅野 2003)。土製煮炊具の空白地帯において、鉄製煮炊具の流通が十分であったかどうかは明らかにできないが、筆者は全ての土製煮炊具が単に鉄製品の補完的役割のみに終始していたと捉えるべきではないと考える。

東海地方の土師質鍋の中心である伊勢型鍋は、鉄鍋を模倣して作られたものではなく、中世後期でも独自に形態を変化させていく。伊勢型鍋の中心地である伊勢だけではなく、尾張でも15世紀後半までに伊勢型鍋が独自の形態変化を遂げたと言われている(北村 1996)。伊勢や尾張など土師質煮炊具が多く存在する地域では、前代からの伝統を守りながら鉄製品の単なる補完品としての用途

ではなく、各地域で使いやすいように創意工夫された結果、独自性と多様性のある土器が展開したのではないだろうか。

同様に古代の甕形土器から成立し、変遷を追うことができる土器は他地域にもある。

播磨地域の播丹型と呼ばれる土器もその一つである。播磨の煮炊具には、大きく分けて鍋形タイプと羽釜形タイプ、甕形タイプの3種類がある(長谷川 2007)。鍋形タイプと羽釜形タイプは鉄製品を模倣した土器だが、甕形タイプは古代の甕形土器の系譜を引いているとされる。この甕形タイプの土器が播丹型と呼ばれる土器である。そう呼ばれる所以は、東播磨から丹波を主な分布範囲とするためである(ただし、西播磨や淡路にも分布する)。甕形タイプは基本的には土師器で、成形には東播系中世須恵器の技術的影響を受け継いでいるとされる。13世紀前半に播磨において土製煮炊具が成立し、14世紀後半に独自性が出現した。16世紀中頃から後半には中世的様相が変容し、近世的様相が萌芽したと位置付けられている。

このように在地の煮炊具が成立し、独自性を持って展開していくことや、中世的様相から近世的様相へ変化していく流れは、伊勢型鍋においても確認されている。画期となる時期も大体同じくらいの時期が相当する。この画期は時代の変わり目とほぼ一致している。すなわち、13世紀前半は平安時代から鎌倉時代に変わる時期、14世紀後半は室町時代から戦国時代へ移り変わろうとしている時期、16世紀後半は戦国・安土桃山時代から江戸時代へと向かう時期である。よって、中世の在地土製煮炊具の成立と展開には全国的な普遍性があったと捉えることができる。そうした普遍性の中で地域ごとの独自性が生まれたのではないだろうか。政治的転換点として時代の変化が起こった時期は、土器工人集団も変化を求められたのかもしれない。

土師質製品の耐久性に関しては、消耗品としての価値があり、多量消費を前提としているとの見方がある(伊藤 1996c)。祭祀用など、金属器ではまかなうことができない役割があったのかもしれない。消耗品としての煮炊具の役割については今後の課題である。

畿内における土製の釜⁽¹⁾の製作と流通について論じた菅原正明によると、古代の畿内では土師質の釜を竈と甗と共に3点で一つの炊飯祭祀に用いた(菅原 1983)。しかし、11世紀になると、土師質の釜は日常煮炊具として使用されるようになった。これは、律令制の崩壊に伴い、こうした竈具を用いた大陸系の炊飯祭祀が行われなくなったことや、鉄釜が一部で日常品として使われ出したことによるという。鉄釜は奈良時代には存在し、宮殿や寺院で煮炊きや湯釜として用いられたとされる。その後、12世紀末には、土釜が庶民の煮炊用として広く普

及した。菅原は、この時期を畿内における土釜の画期と位置づけ、鉄釜が製作されていても土釜が量産され、鉄釜を模倣した瓦器釜が出現するのは、鉄釜が高価で庶民が簡単に入手できなかったためであり、鉄釜が庶民へ普及したことによって、土釜の製作が停止したと結論付けている。

畿内において日常の煮炊具が甕から土釜に変わる変化に似た状況は、東海地方でも確認できる。伊勢型鍋も11世紀頃に甕形態から鍋形態へと変化しているのである(新田 1985)。そして、甕とセットで使っていたと思われる長胴甕が消失し、画一化するという。新田は、その要因として、炊飯祭祀の廃止や鉄釜の使用を挙げている。

畿内や播磨・伊勢など個々の地域で把握されていた、煮炊具が成立し独自性が出現した後の近世的様相への変化は、政治的な変容期とも合致する、普遍的な動向であったと考えられる。

註

(1)菅原は、土師器、緑釉陶器、瓦器の釜を土釜と呼んでいる。

第4章 煮炊具の流通

ここまで考古学の視点から東海地方の煮炊具について論じてきたが、本章では文献史学の成果も参考にしながら煮炊具の流通を考えてみたい。

脇田晴子は、陶磁器を含めた土器全体の流通について論じ、土器流通の画期を示した(脇田 1994)。源平動乱期の12世紀後半から、土器の流通はそれまでとは全く様相を異にするという。広域流通品が顕著に認められるようになり、常滑製の大甕が関東や瀬戸内海沿岸各地に分布するのがこの時期で、庶民層にまで需要を持つ生活必需品の広域流通を指摘している。

流通の仕方については、領主が生産や流通を支配していたか、領主の土地支配とは別に手工業集団が同業的共同体で生産を行い、流通業者と連携していたか、また、貢納製品の商品化か、当初からの商品生産か、といった流通構造や生産システムに関する問題を挙げている。これらの問題に関しては史料がないため考察できず、他の手工業の場合を援用して推察するしかないとしつつも、「貢納物として土器生産の大部分を領主が収取することも考えられず、貢納は田地の地代の代物納程度に定額化していた」として、土器づくりの集団による商品生産と流通を想定する。また、中世においては、陸路に対して船の運賃がはるかに格安で、広域流通品の主たる産地と分布が北東の日本海域、太平洋岸、瀬戸内海沿岸であることから、船による運送が行われていただろうと指摘した。

では、伊勢湾を中心とした東海地方の物流はどのような構造だったのだろうか。

永原慶二は、大名領国制下の物流を考えるにあたり、伊勢地域の物流構造について論じている(永原 1997)。伊勢方面から東海・関東方面に運ばれる商品の代表的なものが米と常滑・尾張・美濃の焼き物で、大湊に入港する小廻船の積載物資として米や薪の記載回数が多いが、知多半島からの船は米や麦などを積んでいた記載例はなく、塩や常滑の焼き物を運んでいたのではないかという。常滑の焼き物も一旦大湊に集積され、大型の船に積み替えられて関東や東北地方まで広く流通した可能性が高いとする。

永原は、海路による焼き物の輸送に加え、永禄元(1558)年の史料「近江保内商人申状案」から、陸路での輸送も想定している。この史料は、桑名から鈴鹿山脈を横断する伊勢山越えルートで近江に至る輸送路の支配をめぐり、保内商人と枝村商人が争った際の保内商人側の主張を示したもので、この中の「土の物」という記述を陶器と解釈し、瀬戸・美濃・常滑などの焼き物が桑名に集荷され、その一部が山を越えて商品として近江に搬入されたのではないかと述べる。

中世の伊勢と関東間を対象に、太平洋の水上交通の実態を検証したのが綿貫

友子である。現在の伊勢湾・知多湾・三河湾・渥美湾を伊勢海と名付け、大湊と桑名を大廻船の主要拠点とした。例えば、美濃で伐採された用材が、木曾川水系を下って桑名から関東へ運ばれたという。戦国期には、兵力や軍需品の移送経路と交通手段を確保することだけではなく、富の集積地を押さえ、経済的な基盤を掌握することが極めて重要で、沿岸部を支配した領主が水運の統制と保護を行っていたと指摘している(綿貫 1998)。

土器の流通に関する問題は、考古学の立場からも明らかにすることが難しい。土師質煮炊具に限って言えば、皿類と違って集落でも城館でも遺物の量や質にほとんど差はなかった。よって、領主による生産や流通システムの支配があったというより、工人集団が独自に生産と流通を担っていたと考えている。また、広域流通品と同様に船を利用して運んだとみられるが、陸路での運送も想定すべきかと思う。史料には明示されないものの、陶器と一緒に運ばれたのかもしれない。広域流通品だった陶器の分布圏と煮炊具の分布圏が類似していることから、その可能性は高いだろう。

広域流通品の陶器は、若狭湾から北の日本海側は越前焼、伊勢湾から東は常滑焼の甕と瀬戸美濃焼の播鉢がセットで、畿内から西は備前焼が流通した。そして、畿内周辺では信楽焼や丹波焼が中規模の流通をしていた。煮炊具の地域圏は、琵琶湖から伊勢湾を境にして東側と西側、そして日本海側の三つの地域に分けられるという。東側には内耳鍋と鉄鍋が分布する。関東以北は境界が不明だが、東北地方北部には土師質や瓦質の内耳鍋はみられない。琵琶湖から伊勢湾の境界以西には土鍋と羽釜がある。これら境界の東側と西側の二つの地域では、土器と鉄鍋が併用されていた。一方、日本海側は基本的に煮炊き用の土器がなく、鉄鍋だけの使用地域だったという(小野 1991)。

浅野晴樹によると、一般的に東北の大半の地域では、煮炊具の多くは鉄製鍋が使用され、関東地方では内耳鍋や播鉢などが確認されているという。南武蔵から相模にかけての地域では、量はわずかだが土製羽釜が確認されている。しかし、器壁が薄く耐久性に問題があると共に、北関東の鍋ほど出土量も認められない。甲斐から信濃の一带は、桶形の内耳鍋が分布する点で共通する。東海から南関東にかけて、内耳鍋と羽釜が分布することが知られ、現在の愛知県から静岡県にかけて土師質の鍋が分布する。南勢では伊勢型鍋、北勢では羽釜、尾張から遠江の一带では内耳鍋が主体となり、内陸の美濃や飛騨では、ほとんど土製煮炊具が確認されていない(浅野 2003)。

以上のように、陶器の流通圏と煮炊具の地域圏は太平洋側と日本海側、瀬戸内海の大きく三つに分かれることから、それぞれの海域を利用して運ばれたものと考えられる。



図 28 陶器の流通圏



図 29 煮炊具の地域圏

最後に、煮炊きの場について考えてみたい。

平安時代までの住居には竈があるが、中世に入ると東日本は囲炉裏で鍋を用い、西日本では竈で釜を用いる習慣が引き継がれたと言われている。

三宅西条城跡で鉄鍋のつるが存在するという事は、鍋を吊して囲炉裏にかけたのではないだろうか。つまり、鈴鹿市の辺りの住居には囲炉裏があったと想定できる。以下、各地域で出土した煮炊具から大まかな推定を試みる。

岐阜県は穀見塚前遺跡の鉄釜出土例からみて竈、愛知県は内耳鍋と竈にかけるための機能を失った羽釜 A の出土と、清洲城下町遺跡の内耳鍋につくリング状鉄製品の例からみて囲炉裏、三重県は三宅西条城跡から出土した鉄鍋のつるがあるものの、羽釜や茶釜形羽釜もみられることから、竈と囲炉裏の混在する地域であったと考えられよう。

福井県の一乗谷朝倉氏遺跡でも竈ではなく、囲炉裏を利用したと既に述べた。囲炉裏では、五徳を利用するか自在鉤で鍋を吊す。囲炉裏と竈の境界は東海地方と北陸のあたりにありそうだが、中部地方は東日本に含まれる場合と西日本に含まれる場合の両方があり、東西の境界は曖昧である。生活習慣の境界も曖昧で、囲炉裏と竈が混在していた地域なのかもしれない。

おわりに

本研究の目的は、土師質煮炊具を消費と流通の視点から捉え直すことであった。東海地方は全国屈指の窯業地を抱えていることで、陶器の研究の蓄積が厚く、陶器の編年を利用して土器の編年や生産について盛んに論じられてきた。だが、中世後期には既に日常の煮炊きのために鉄製煮炊具が使われ出したにもかかわらず、なぜそれに比べて耐久性の劣る土師質煮炊具が、中世後期に独自の発展を遂げたのかということが最大の疑問点であった。

煮炊具の地域圏は東と西、そして日本海側という三つの地域に分けられるが、東海地方という枠組みの中で見た場合、この地域に境目が存在する。その境目の様子を明らかにすることで、土師質煮炊具の消費と流通の実態を明らかにできると考えた。先学の研究成果の裏付けを行うとともに、鉄製煮炊具との比較によって、東海地方における煮炊具の消費と東西日本の境目における地域性を示すことを試みた。土器の様相や遺跡間での差異をもとに考察を行った成果は以下のとおりである。

東海地方全体では伊勢型鍋が 21%、羽釜が 33%、内耳鍋が 35%を占めていた。

伊勢では、伊勢型鍋が煮炊具の主体を占め、特に南勢で顕著であると言われてきたが、中世後期に至ってもなおこの傾向は認められた。中北勢では羽釜も一定量出土しており、鍋を上回るほど出土している遺跡もあれば、羽釜のみ出土している遺跡もあった。こうした傾向は、北部へ行くほど強まっており、中北勢と南勢では器種の比率にはっきりとした差が生じていることが明らかとなった。また、鍋と羽釜それぞれの口径を比較した結果、同じ系統の鍋や釜でも遺跡によって口径に差異があることが分かった。例えば、島貫遺跡の鍋は 36 cm 以上のものが多く、大型品を使用していた。一方の伊坂城跡では、23 cm 以下の羽釜が集中し、小型品を利用していたことが確認できる。両遺跡の羽釜は共に中北勢系の羽釜であることから、口径の違いが工人集団の違いを示しているのではなく、生産者側が規格の異なる商品を生産し、消費者側が選択していたと考えられる。

愛知県全体では、内耳鍋が煮炊具の半数を占め、羽釜と共に主体となっていた。内耳鍋は、尾張と三河で形態に違いがあり、さらに形態の違いは口径の違いにも関係していることが判明した。尾張の内耳鍋はほぼ半球形だが、三河の内耳鍋には「く」の字形と半球形の両方がみられる。「く」の字形は 23 cm 以下が主流で 30 cm 以上のものはないのに対し、半球形は 24~31 cm のみであった。この口径の違いは、鍋の形によって消費者側が使い分けをするために選択した結果か、あるいは生産者側が規格の異なる商品を生産したか、もしくは工人自体が異なっ

ていたなど、複数の可能性が想定される。

岐阜県では、煮炊具の出土例自体が少なかったが、伊勢型鍋は数点出土していた。羽釜や内耳鍋も数点しかみられなかった。煮炊具に関して岐阜県独自の在産土器というのは見当たらず、伊勢や尾張など近隣で生産された煮炊具を消費していた可能性が高い。また、出土例の少なさから、土師質煮炊具の利用が伊勢や尾張、三河より少なかったのではないかと思われる。一方で、鉄製品の良好な資料があり、岐阜県は鉄鍋使用圏に含まれる地域と考えた。

鉄製煮炊具の流通が十分であったかどうかは明らかにできなかったが、土師質煮炊具が単に鉄製品の補完的役割のみに終始していたと捉えるべきではない。伊勢や尾張など土師質煮炊具が多く存在する地域では、前代からの伝統を守りつつも、鉄製品の単なる補完品としての用途ではなく、各地域で使いやすいように創意工夫された結果、独自性と多様性のある土器が展開したのではないだろうか。

煮炊具の流通構造についても考察を行った。土師質煮炊具の器種構成は集落でも城館でもあまり差はなく、領主による生産や流通の支配があったというより、工人集団が独自に生産と流通を担っていたと考えられる。瀬戸美濃焼や常滑焼などの広域流通品の流通圏と煮炊具の地域圏が重なることから、広域流通品と同様に、伊勢湾や太平洋の海上交通路を利用して大量に運んだのであろう。内陸部へは河川交通路と陸路での運送も想定すべきかと思う。史料では明示されないものの、陶器と一緒に運ばれた可能性が高い。陶器の流通圏と煮炊具の地域圏は、太平洋側と日本海側、瀬戸内海の大きく三つに分かれるため、それぞれの海域を利用して運ばれたと考えられる。

また、東海地方での煮炊具の成立と独自性の出現、そして中世的様相から近世的様相への変容は、その変化の時期が政治的転換点と近接することから、全国的な政治的变化に伴い、煮炊具も変容していったとの結論に至った。地域ごとの土器の変化は、全国的な普遍性を持ち、社会の動向と密接に関連していたことがうかがえる。

本研究をまとめるにあたり、温かいご指導をいただいた小澤毅先生や的確な助言をいただいた山中章先生に深く感謝申し上げます。また、時にはアドバイスもいただいた三重大学考古学研究室の皆様にも感謝いたします。その他、様々な方にお世話になりました。末筆ながら、お礼申し上げます。

表 1 主な煮炊具出土遺跡

地域	遺跡名	所在地	遺跡の性格	遺物
伊勢	上野遺跡	四日市市	集落	羽釜、茶釜形羽釜
	伊坂城	四日市市	城館	内耳鍋、羽釜、茶釜形羽釜
	力尾城跡	菟野町	城館	羽釜
	古市遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類、茶釜形羽釜
	家野遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜、炮烙
	宮ノ腰遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類、茶釜形羽釜
	下川遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類、茶釜形羽釜、炮烙
	六大B遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類、茶釜形羽釜、内耳鍋
	安濃津遺跡群	津市	港町(都市遺跡)	伊勢型鍋、羽釜A・B類、茶釜形羽釜
	安養院跡	津市	寺院、集落	伊勢型鍋、羽釜
	烏貫遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜、茶釜、取手付鍋
	北畠氏館跡	津市	城館(館跡)	伊勢型鍋、羽釜、炮烙、茶釜、十能、鉄鍋
	前田町屋遺跡	津市	集落	伊勢型鍋、羽釜
	上相田遺跡	松阪市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類、茶釜形鍋
	伊勢寺遺跡	松阪市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類
	伊勢寺廃寺	松阪市	寺院	伊勢型鍋、羽釜B類
	向王子B遺跡	松阪市	集落	伊勢型鍋
	ミゾコ遺跡	多気町	集落	伊勢型鍋、羽釜B類、茶釜形羽釜
	若宮遺跡	多気町	水銀生産遺跡か	伊勢型鍋、羽釜、茶釜形羽釜、炮烙
	岩出遺跡群所り垣地区	玉城町	集落	羽釜、鉄鍋
	岩出遺跡群左郡地区	玉城町	集落、中世墓	伊勢型鍋、羽釜
	楠ノ木遺跡	玉城町	集落	伊勢型鍋、羽釜A・B類、茶釜形鍋

地域	遺跡名	所在地	遺跡の性格	遺物
尾張	馬引横手遺跡	一宮市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類、茶釜型羽釜
	尾張国府跡	稲沢市	国府	伊勢型鍋、内耳鍋、羽釜A類、茶釜形羽釜
	下津城跡	稲沢市	守護所	伊勢型鍋、内耳鍋、羽釜A類、炮烙、三足付内耳鍋
	朝日西遺跡	清須市	集落、城下町	伊勢型鍋、内耳鍋、羽釜、茶釜形羽釜
	土田遺跡	清須市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類、茶釜型羽釜
	清洲城下町遺跡	清須市	城下町	伊勢型鍋、内耳鍋、羽釜B類、茶釜形羽釜、茶釜形鍋、炮烙、釜、羽付内耳鍋、鉄鍋、リング状鉄製品
	阿弥陀寺遺跡	あま市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類
	小牧山城	小牧市	城館	伊勢型鍋、羽釜、内耳鍋
	志賀公園遺跡	名古屋	集落	伊勢型鍋、羽釜A・B類、内耳鍋、鉄鍋
	名古屋城三の丸遺跡	名古屋市	城館	伊勢型鍋、羽釜A・B類、内耳鍋、茶釜形羽釜、炮烙、茶釜形鍋
	岩作城	長久手市	城館	伊勢型鍋、内耳鍋、羽釜B類、石鍋
	岩崎城	日進市	城館	内耳鍋、羽釜
	沓掛城	豊明市	城館	内耳鍋、羽釜
	柳が坪遺跡	東海市	集落	羽釜B類、内耳鍋(くの字形)
	神明社貝塚	南知多町(篠島)	集落	伊勢型鍋、内耳鍋(半球形・くの字形)、羽釜、茶釜形羽釜
	麻生田大橋遺跡	豊川市	集落	伊勢型鍋、内耳鍋(半球形・くの字形)、茶釜形羽釜、器種不明釜
	杉山遺跡	新城市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類、内耳鍋(半球形・くの字形)
	吉田城遺跡	豊橋市	城館	内耳鍋、羽釜A類、茶釜型羽釜、鉄鍋、遠江型鍋

地域	遺跡名	所在地	遺跡の性格	遺物
美濃	飛騨	飛騨市	城館	内耳鍋、羽釜、石鍋
		郡上八幡市	集落	鉄鍋、鉄釜
		揖斐川町	集落	伊勢型鍋、羽釜、鉄鍋
		揖斐川町	集落	羽釜
		揖斐川町	集落	羽釜A類
		関ヶ原町	集落	羽釜
		大垣市	水田、集落	伊勢型鍋
		岐阜市	城館	内耳鍋、羽釜、茶釜
		岐阜市	集落	内耳鍋
		岐阜市	集落	伊勢型鍋、羽釜A類、炮烙
		関市	集落	内耳鍋、茶釜形羽釜、鉄鍋
		美濃加茂市	集落	伊勢型鍋、羽釜B類
		可児市	集落	伊勢型鍋

参考文献

- 秋本太郎 2014「調理具—関東地方の播鉢を中心に—」『中世城館の考古学』高志書院
- 朝岡康二 1993『鍋・釜』ものと人間の文化史 72 法政大学出版局
- 浅野晴樹 2003「東国における在地土器の生産と流通」『戦国時代の考古学』高志書院
- 足立順司 1987「内耳鍋の研究」『研究紀要Ⅱ』静岡県埋蔵文化財調査研究所
- 池端清行、米山浩之 1990『安養院跡発掘調査報告』津市埋蔵文化財調査報告 19 津市教育委員会
- 石黒立人編 1990『阿弥陀寺遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 11 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 五十川伸矢 1992「古代・中世の鉄器」『研究報告』第 46 集 国立歴史民俗博物館
- 市村高男 2004「中世西日本における流通と海運」『中世西日本の流通と交通』高志書院
- 伊藤太佳彦 1999『馬引横手遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 第 84 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1989「丹生地区内遺跡群 若宮遺跡」『昭和 63 年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 第 1 分冊』三重県教育委員会
- 伊藤裕偉 1990「中世南伊勢系の土師器に関する一試論」『Mie history』1 三重歴史文化研究会
- 伊藤裕偉 1991『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告—第 3 分冊—楠ノ木遺跡』三重県埋蔵文化財調査報告 101-3 三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1992「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」『研究紀要』第 1 号 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1996a『宮ノ腰遺跡発掘調査報告Ⅰ』三重県埋蔵文化財調査報告 153 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1996b『岩出地区内遺跡群発掘調査報告—一度会郡玉城町岩出所在、ケカノ辻・角垣内・蚊山地区の調査—』三重県埋蔵文化財調査報告 113 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 1996c「伊勢の中世煮沸用土器から東海を見る」第 4 回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 伊藤裕偉 1997『安濃津』三重県埋蔵文化財調査報告 147 三重県埋蔵文化財センター
- 伊藤裕偉 2007「安濃津遺跡群の出土遺物に関する再検討」『研究紀要』第 16-1 号 —中世特集— 三重県埋蔵文化財センター
- 稲本賢治 1992『近畿自動車道(勢和～伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 第 4 分冊 蚊山遺跡所り垣地区』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
- 岩野見司 1974「浅井町 (7)清郷遺跡」『新編一宮市史 資料編 4』一宮市史編纂室
- 内堀信雄ほか 1999『城之内遺跡 北町堀田線・宮口町高見線街路事業に伴う緊急発掘調査』岐阜市教育文化振興事業団 埋蔵文化財調査事務所

- 宇野隆夫 1996「中世土鍋が意味するもの—形容詞がある土器—」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 宇野隆夫 1997「中世食器様式の意味するもの—計量分析による使用法の復元」『研究報告』71集 国立歴史民俗博物館
- 太田成和編 1960『郡上八幡町史』上巻 八幡町役場
- 小澤一弘ほか 1992『朝日西遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 28集 愛知県埋蔵文化財センター
- 小野正敏 1991「城館出土の陶磁器が表現するもの」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 尾野善裕 1997「中世食器の地域性 4—東海・濃飛」『研究報告』第71集 国立歴史民俗博物館
- 春日井恒、花井千幸 1991『上野遺跡』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書VI 四日市市遺跡調査会
- 春日井恒 1992『上野遺跡 2』四日市市遺跡調査会文化財調査報告書 IX 四日市市遺跡調査会
- 片岡博、新名強 2001『力尾城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 217 三重県埋蔵文化財センター
- 金子健一 2000「土師質煮炊具からみた中世の東海と東国～14・15世紀の様相を中心に～」『研究紀要』第8輯 瀬戸市埋蔵文化財センター
- 北村和宏 1988『杉山遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第5集 愛知県埋蔵文化財センター
- 北村和宏 1996「尾張の『伊勢型鍋』」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム
- 木村光一 1986『沓掛城址』豊明市教育委員会
- 倉田直純 1990a「伊勢寺廃寺」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財調査報告 92-2 三重県埋蔵文化財センター
- 倉田直純 1990b「下川遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財調査報告 92-2 三重県埋蔵文化財センター
- 小林秀 1989「上相田遺跡」『昭和63年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告第2分冊』三重県埋蔵文化財調査報告 88-2 三重県教育委員会
- 佐藤浩司 2003「西国における在地産土器の生産と流通」『戦国時代の考古学』高志書院
- 柴田圭子 2014「中世城郭出土の貯蔵具」『中世城館の考古学』高志書院
- 四柳嘉章 2003「漆器と技術」『戦国時代の考古学』高志書院
- 菅原正明 1983「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所創立30周年記念論文集刊行会
- 鋤柄俊夫 1997「土製煮炊具にみる中世食文化の特質」『研究報告』71集 国立歴史民俗博

物館

杉崎章 1971『柳が坪遺跡』東海市教育委員会

鈴木正貴 1996a「総論—東海地方の中世から近世の煮沸具の様相と諸問題—」『鍋と甕そのデザイン』考古学フォーラム

鈴木正貴 1996b「東海地方の内耳鍋・羽付鍋・釜」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

鈴木正貴 1996c「東海地方の土師器内耳鍋の生産について」第4回東海考古学フォーラム『鍋と甕そのデザイン』東海考古学フォーラム

竹田憲治編 2003『近畿自動車道名古屋神戸線(第二名神)愛知県境～四日市市 JCT 建設事業に伴う伊坂城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 227・2 三重県埋蔵文化財センター

武部真木編 2000『岩作城跡・能見城跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 89集 愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター

田中健夫 1991『海東諸国紀』岩波書店

手塚直樹 2007「中世の陶磁器」『暮らしの考古学シリーズ① 土器の考古学』学生社

永井宏幸 1996「清郷型鍋再考」『年報』平成7年度 愛知県埋蔵文化財センター

中嶋隆、坪井裕司、丸田強士 1990『小牧山城発掘調査報告書』小牧市教育委員会

永原慶二 1997『戦国期の政治経済構造』岩波書店

新名強 1999『前田町屋遺跡第2次調査 前田地区・大明神地区』三重県埋蔵文化財調査報告 175 三重県埋蔵文化財センター

新田洋 1985「平安時代～中世における煮炊用具—「伊勢型」鍋—に関する若干の覚書」『三重考古学研究』1 三重考古学談話会

長谷川幸志ほか 2005『重竹遺跡・上西田遺跡・洞雲戸遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書 91 岐阜県文化財保護センター

長谷川眞 2007「播磨における土製煮炊具の様相」『中近世土器の基礎研究 21』日本中世土器研究会

服部久士 1990「家野遺跡」『平成元年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 第1分冊』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター

日栄智子 1997『前田町屋遺跡(第1次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 154 三重県埋蔵文化財センター

福井県立朝倉氏遺跡資料館 1988『特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告Ⅱ 第10次・11次、54次調査』福井県教育委員会、福井県立朝倉氏遺跡資料館

福井県立朝倉氏遺跡資料館 1998 一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査開始 30周年、一乗谷朝倉氏遺跡特別史跡指定 25周年『越前朝倉氏・一乗谷一眠りからさめた戦国の城下町—』福井県立朝倉氏遺跡資料館

- 福田哲也 1990「向王子 B 遺跡」『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財調査報告 92-2 三重県埋蔵文化財センター
- 福田哲也ほか 1992『ヒタキ廃寺・打田遺跡・阿形遺跡ほか』三重県埋蔵文化財調査報告 99-2 三重県埋蔵文化財センター
- 藤澤良祐 1991「城館出土の瀬戸・美濃大窯製品」『中世の城と考古学』新人物往来社
- 本堂弘之ほか 1999『一般国道 23 号中勢道路(9I 区)建設事業に伴う六大 B 遺跡(A 地区)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-10 三重県埋蔵文化財センター
- 本堂弘之ほか 2006『一般国道 23 号中勢道路(9I 区)建設事業に伴う六大 B 遺跡(B~I 地区)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 115-11 三重県埋蔵文化財センター
- 前川要 1987『岩崎城跡発掘調査報告書』日進町教育委員会
- 前川嘉宏 1993『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査報告 101-6—第 6 分冊—蚊山遺跡左郡地区』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
- 増田安生 1985『ミゾコ遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 68 三重県教育委員会
- 三重県教育委員会 1983『三宅西条城跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財調査報告 61 三重県教育委員会
- 三島誠ほか 2007『樋原村平遺跡』岐阜県教育文化財団文化財保護センター調査報告書 106 岐阜県教育文化財団文化財保護センター
- 水谷豊 1999『宮ノ腰遺跡発掘調査報告 II』三重県埋蔵文化財調査報告 178 三重県埋蔵文化財センター
- 三輪晃三 2000『南整理遺跡』岐阜県埋蔵文化財センター調査報告書第 57 集 岐阜県文化財保護センター
- 三輪晃三 2012『芥見町屋遺跡』岐阜県文化財保護センター調査報告書第 124 集 岐阜県文化財保護センター
- 森川常厚 1989『昭和 63 年度農業基盤整備事業地域 埋蔵文化財発掘調査報告 第 2 分冊』三重県埋蔵文化財調査報告 88-2 三重県教育委員会
- 安井俊則編 1991『麻生田大橋遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 21 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 山崎恒哉、稲本賢治 1990「宮地遺跡」『近畿自動車道(勢和~伊勢)埋蔵文化財発掘調査概報 VI』三重県教育委員会、三重県埋蔵文化財センター
- 山下勝年編 1989『神明社貝塚』南知多町教育委員会
- 脇田晴子 1994「中世土器の流通」『岩波講座日本通史第 9 巻 中世 3』岩波書店
- 綿貫友子 1998『中世東国の太平洋海運』東京大学出版会

<島貫遺跡>年代順(以下同様)

伊藤裕偉、川崎志乃 1998『嶋抜 第1次調査』三重県埋蔵文化財調査報告 174 三重県埋蔵文化財センター

伊藤裕偉 2000『嶋抜Ⅱ』三重県埋蔵文化財調査報告 212-1 三重県埋蔵文化財センター

伊藤裕偉、川崎志乃 2001『嶋抜Ⅲ』三重県埋蔵文化財調査報告 218 三重県埋蔵文化財センター

<北畠氏館跡>

伊藤裕偉 1993『多気遺跡群発掘調査報告 ― 志保郡美杉村上多気所在 ―』三重県埋蔵文化財調査報告 109 三重県埋蔵文化財センター

竹田憲治、山中吉明 1997『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅰ』美杉村埋蔵文化財調査報告 4 美杉村教育委員会

山中吉明ほか 1998『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅱ』美杉村埋蔵文化財調査報告 5 美杉村教育委員会

石淵誠人 1999『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅲ』美杉村文化財調査報告 6 美杉村教育委員会

石淵誠人 2001『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅳ』美杉村文化財調査報告 7 美杉村教育委員会

石淵誠人、伊藤裕偉 2002『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅴ』美杉村文化財調査報告 8 美杉村教育委員会

宗団法人 北畠神社、美杉村教育委員会 2002『北畠氏館跡Ⅵ 名勝及び史跡 北畠氏館跡庭園 記念物保存修理事業報告』宗団法人 北畠神社、美杉村教育委員会

小林俊之 2004『北畠氏館跡Ⅶ 多気北畠氏遺跡第21次調査』美杉村文化財調査報告 10 美杉村教育委員会

小林俊之 2005『北畠氏館跡Ⅷ・六田館跡Ⅱ 多気北畠氏遺跡第23・25次調査』美杉村文化財調査報告 12 美杉村教育委員会

小林俊之ほか 2005『北畠氏館跡Ⅸ 多気北畠氏遺跡第26次調査・北畠氏館跡総括編』美杉村文化財調査報告 13 美杉村教育委員会

石淵誠人 2007『多気北畠氏遺跡発掘調査報告 北畠氏館跡Ⅹ』津市埋蔵文化財調査報告 6 津市教育委員会

熊崎司 2015『多気北畠氏遺跡第36次調査報告 北畠氏館跡Ⅺ』津市埋蔵文化財調査報告 39 津市教育委員会

<清洲城下町遺跡>

- 鈴木正貴ほか 1990『清洲城下町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 17 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 小澤一弘ほか 1992『清洲城下町遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 27 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴ほか 1994a『清洲城下町遺跡Ⅲ・外町遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 50 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴ほか 1994b『清洲城下町遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 53 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴ほか 1995『清洲城下町遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 54 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 蟹江吉宏ほか 1996『清洲城下町遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 65 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴ほか 1997『清洲城下町遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 70 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 宮腰健司ほか 2002『清洲城下町遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 99 集 愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター
- 星野浩二 2005『清洲城下町遺跡Ⅸ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 131 集 愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター
- 鈴木正貴ほか 2013『清洲城下町遺跡Ⅺ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 183 集 愛知県教育・スポーツ振興財団、愛知県埋蔵文化財センター

<志賀公園遺跡>

- 永井宏章ほか 2001『志賀公園遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 90 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 石黒立人ほか 2004『志賀公園遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 121 集 愛知県埋蔵文化財センター

<名古屋城三の丸遺跡>

- 梅本博志ほか 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅰ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 15 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 梅本博志ほか 1990『名古屋城三の丸遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 16 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 鷲見豊ほか 1992『名古屋城三の丸遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 37 集 愛知県埋蔵文化財センター

遠藤才文ほか 1993『名古屋城三の丸遺跡Ⅳ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 44 集
愛知県埋蔵文化財センター

松田訓ほか 1995『名古屋城三の丸遺跡Ⅴ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 60 集
愛知県埋蔵文化財センター

松田訓ほか 2003『名古屋城三の丸遺跡Ⅵ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 115 集
愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター

鈴木正貴ほか 2005『名古屋城三の丸遺跡Ⅶ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 127
集 愛知県教育サービスセンター、愛知県埋蔵文化財センター

武部真木ほか 2008『名古屋城三の丸遺跡Ⅷ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第 161
集 愛知県教育・スポーツ振興財団、愛知県埋蔵文化財センター

<尾張国府跡>

北條献示編 1979『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅰ』稲沢市文化財調査報告Ⅳ 稲沢市教育委
員会

北條献示編 1980『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅱ』稲沢市文化財調査報告Ⅸ 稲沢市教育委
員会

北條献示編 1981『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅲ』稲沢市文化財調査報告Ⅺ 稲沢市教育委
員会

岩野見司編 1982『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅳ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅤ 稲沢市教育委
員会

日野幸治ほか 1983『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅴ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅧⅢ 稲沢市
教育委員会

日野幸治編 1984『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅵ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩ 稲沢市教育
委員会

日野幸治編 1985『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅶ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅢⅢ 稲沢市教
育委員会

日野幸治編 1986『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅷ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅧⅦ 稲沢市教
育委員会

日野幸治編 1987『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅸ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅩ 稲沢市教育
委員会

日野幸治編 1988『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅹ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅩⅡ 稲沢市教
育委員会

日野幸治編 1989『尾張国府跡発掘調査報告書Ⅺ』稲沢市文化財調査報告ⅩⅩⅩⅣ 稲沢市教
育委員会

<下津城跡>

- 岩野見司 1980『下津城跡発掘調査概要報告書Ⅰ』稲沢市文化財調査報告 X 稲沢市教育委員会
- 岩野見司 1983『下津城跡発掘調査概要報告書Ⅱ』稲沢市文化財調査報告 XII 稲沢市教育委員会
- 岩野見司 1984『下津城跡発掘調査概要報告書Ⅲ』稲沢市文化財調査報告 XVI 稲沢市教育委員会
- 日野幸治 1985『下津城跡発掘調査報告書Ⅰ』稲沢市文化財調査報告 XXII 稲沢市教育委員会
- 日野幸治 1986『下津城跡発掘調査報告書Ⅱ』稲沢市文化財調査報告 XXVI 稲沢市教育委員会
- 日野幸治編 1987『下津城跡発掘調査報告書Ⅲ』稲沢市文化財調査報告 XXIX 稲沢市教育委員会
- 日野幸治編 1988『下津城跡発掘調査報告書Ⅳ』稲沢市文化財調査報告 XXXI 稲沢市教育委員会

<吉田城遺跡>

- 山田基ほか 1992『吉田城遺跡』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 26 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 小島廣也ほか 1995『吉田城遺跡Ⅱ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 59 集 愛知県埋蔵文化財センター
- 原田幹ほか 1998『吉田城遺跡Ⅲ』愛知県埋蔵文化財センター調査報告書 78 集 愛知県埋蔵文化財センター

<江馬氏城館跡>

- 前川要ほか 1995『江馬氏城館跡Ⅰ 下館址発掘調査報告書』神岡町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室
- 宇野隆夫ほか 1996『江馬氏城館跡Ⅱ 下館跡門前地区と庭園の調査』神岡町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室
- 前川要ほか 1997『江馬氏城館跡Ⅲ 下館跡南辺の調査』神岡町教育委員会、富山大学人文学部考古学研究室
- 大平愛子ほか 1998『江馬氏城館跡Ⅳ 下館跡南堀延長部周辺の調査』神岡町埋蔵文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書第 5 集 神岡町教育委員会
- 大平愛子ほか 2001『江馬氏城館跡Ⅴ 下館跡堀内地区西辺と北西隅部の調査』神岡町埋蔵文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書第 6 集 神岡町教育委員会

三好清超、大平愛子 2010『江馬氏城館跡VI 整備工事に伴う下館跡の発掘調査』飛騨市文化財調査報告書・江馬氏城館跡調査報告書 1-7 飛騨市教育委員会

< 岐阜城跡 >

高橋方紀ほか 2013『岐阜城跡 織田信長居館伝承地の確認調査』2 岐阜市教育委員会、岐阜市教育文化振興事業団

恩田裕之ほか 2015『岐阜城跡 史跡整備に伴う発掘調査』3 岐阜市教育委員会、岐阜市教育文化振興事業団

恩田裕之ほか 2016『岐阜城跡 織田信長居館伝承地の確認調査』4 岐阜市教育委員会、岐阜市教育文化振興事業団

図表出典

図 1 伊勢型鍋(伊藤裕偉 1997)、羽釜 A(伊藤太佳彦 1999)、内耳鍋(安井 1991)、その他(鈴木 1994b)より。

図 2 山田ほか(1992)より。

図 3 鈴木(1996a)、金子(2000)をもとに筆者作成。

図 4～11 各報告書をもとに筆者作成。

図 12 伊藤(2007)第 4 図を一部改変。

図 13 竹田編(2003)より。

図 14 蟹江ほか(1996)より。

図 15 各報告書をもとに筆者作成。

図 16 蟹江ほか(1996)より。

図 17～21 各報告書をもとに筆者作成。

図 22 五十川(1992)より。

図 23 福井県立朝倉氏遺跡資料館(1988)より。

図 24 福井県立朝倉氏遺跡資料館(1998)より。

図 25 1：三重県教育委員会(1983) 2：稲本(1992) 3：石淵・伊藤(2002) 4：永井ほか(2001)より。

図 26 1,2：伊藤(1993) 3,4：鈴木ほか(2013) 5：山田ほか(1992)より。

図 27 太田編(1960)より。

図 28 小野(1991)第 9 図を一部改変。

図 29 同上。

表 1 各報告書をもとに筆者作成。